『乘つて見たいなァ。』

大江山

『賴光はえらい。』

巻　三

イマハ

『春はいゝなァ。』

ハヤオキ

『早起するのは愉快だ。』

うちの子ねこ

『うちの子ねこはかはいゝ。』

お花

『お花はいゝ子だ。』

わらびとり

『わらび取は面白かつた。』

竹の子

『竹の子ののびるのは面白い。』

きやうだい

『仲のいゝ兄弟だなァ。』

五一ぢいさん

『面白いぢいさんだなァ。』

ささ舟

『ささ舟遊びは面白いなァ。』

水デッパウ

『水鐵砲はどうしたらうまく出來るだらう。』

十五や

『いゝ月だなァ。』

巻　四

柿

『柿を見るとなくなつたおぢいさんがなつかしい。』

白ウサギ

『大國主命はなさけ深い神様だ。』

私どもの町

『私どもの町もだん〳〵ひらけて行くなァ。』

山びこ

『山びこはふしぎだなァ。』

フクロフ

『ふくろふは面白い鳥だ。』

すすはき

『すゝはきは面白いなァ。』

しひの木とかしのみ

『僕だつてまけるものか。』

山がら

『山がらは今頃どうしてゐるだらう。』

曾我兄弟

『曾我兄弟はかんしんだなァ。』

巻五

大日本

『日本はいゝ國だ。』

大蛇たいぢ

『すさのをのみことは強い神様だなァ。』

鯉のぼり

『鯉のぼりは威勢がいゝなァ。』

遠足

『遠足に行つてたのしかつた。』

熊襲征伐

『日本武尊はお強いなァ。』

雨

『雨水はどうなるだらう。』

養老

『孝行の徳は大したものだ。』

虹

『虹はきれいだなァ。』

用水池

『庄屋はえらいなァ。』

八幡太郎

『八幡太郎はえらい大將だなァ。』

巻六

俵の山

『俵の山が出來てうれしい。』

きのこ取

『きのこ取はたのしかつた。』

くりから谷

『平家のあわてかたはどうだ。』

霜

『ひどい霜だなァ。』

虎と蟻

『力を合はせると強いものだなァ。』

弓流し

『名を惜しんだ義經はえらい。』

鮭

『鮭は面白い性質をもつた魚だなァ。』

萬じゅの姫

『萬壽姫は孝行者だなァ。』

磁石

『磁石は鐵をひく力が強い。』

けんやくと義捐

『こまかな人だが出す時は出すなァ。』

賀茂川

『賀茂川はゆかしい川だ。』

氷すべり

『氷すべりは壯快だなァ。』

千早城

『楠木正成はえらい人だなァ。』

記念の木

『あの子が生きてゐたらなァ。』

芽

『だん〳〵春らしくなつて來て嬉しい。』

卷七

世界

『我が日本は世界の重要な地位にあるなァ。』

潮干狩

『潮干狩は面白かつた。』

鎌倉攻

『義貞はえらい大將だなァ。』

傘松

『田舍はなつかしい。』

獅子と武士

『獅子でも懷けばかうもなるものかなァ。』

初夏の夜

『初夏の夜は氣持がいゝ。』

一太郎やあい

『一太郎のおかあさんは感心なものだなァ。』

安倍川の義夫

『安倍川の義夫はほんたうに感心なものだ。』

木下藤吉郎

『なるほど出世をする筈だ。』

マリーのきてん

『マリーは機轉のきく少女だ。』

二百十日

『厄日が無事にすんでうれしい。』

加藤清正

『清正は忠義な武士だなァ。』

卷八

山の秋

『山の秋はきれいだなァ。』

犬ころ

『犬ころはかはいゝなァ。』

競馬

『耕造の心は見上げたものだ。』

楊子江

『楊子江は大きいなァ。』

吳鳳

『吳鳳は本當に神樣だ。』

炭

『炭はさうして燒くものかなァ。』

大岡さばき

『大岡越前守は名奉行だなァ。』

鷲

『鷲はたしかに鳥類の王だ。』

餅つき

『餅つきは面白かつた。』

看板

『看板もいろ〳〵あるなァ。』

塙保己一

『保巳一先生はえらいなァ。』

アメリカだより

『アメリカは非常に發展してゐる。』

稅

『納稅は大切だ。』

廣瀨中佐

『中佐の最後は悲壯だなァ。』

胃ゞからだ

『世の中は相持だ。』

乃木大將の幼年時代

『乃木大將がえらくなられたのも尤だ。』

卷九

トラック島だより

『南洋はいゝところだ。』

弟橘媛

『媛の御最後は本當においたはしい。』

動物ノ色ト形

『注意して見ると、ほんたうに面白いものだなァ。』

五代の苦心

『一貫した佐藤家五代の志は感心なものだ。』

ナイヤガラの瀧

『ナイヤガラの瀧は壯觀だなァ。』

弟から兄へ

『丈夫で仲よく稼ぐのが一番仕合せだ。』

老社長

『老社長はえらいなァ。』

麥打

『麥打はたのしい。』

東京から青森へ

『汽車旅行はおもしろい。』

いもほり

『いもほりは愉快だつた。』

石安工場

『よく働くぢいさんだなァ。』

白馬岳

『白馬登山のお話は面白かつた。』

北風號

『馬でもこんなに主人を思ふものかなァ。』

水兵の母

『水兵のおかあさんの覺悟は感心なものだ。』

巻十

明治神宮參拜

『明治神宮はまことに神々しい。』

アレキサンドル大王と醫師フィリップ

『信じて疑はない人の力は偉大なものだ。』

馬市見物

『馬でも人に馴れると本當にかはいゝものだ。』

パナマ運河

『パナマ運河の開鑿は大したものだなァ。』

銀行

『銀行は成程うまく出來たものだなァ。』

鉢の木

『古の武士氣質は本當にゆかしい。』

登校の道

『霜柱をふんで登校する氣持は何ともいへない。』

文天祥

『文天祥は眞の男子だ。』

温室の中

『溫室の中はあたゝかくて美しい。』

日光山

『日光はまことにきれいだ。』

捕鯨船

『捕鯨船は實に勇壯だなァ。』

たしかな保證

『世の中はごまかしでは通れない。』

進水式

『進水式は壯觀なものだなァ。』

卷十一

孔子

『孔子の人格は實に偉大だ。』

遠足

『遠足はうれしい。』

のぶ子さんの家

『自分の不始末が恥かしい。』

裁判

『今の裁判はありがたいものだ。』

瀬戸内海

『瀬戸内海の景色は何ともいへない。』

畫師の苦心

『畫師の苦心は感心なものだ。』

ゴム

『ゴムはどうして造るのか。』

ふか

『子を思ふ親心はありがたいものだなァ。』

北海道

『北海道はいゝところだ。』

松坂の一夜

『人格の力は偉大なものだ。』

遠泳

『僕も泳げてうれしい。』

暦の話

『暦は實に重寶なものだ。』

リンカーンの苦學

『リンカーンが世界の偉人になつたのは、少年時代の苦心の賜だ。』

南米より

『南米はわれ〳〵の發展すべき土地だ。』

孔明

『諸葛孔明はえらいなァ。』

ウェリントンと少年

『ウェリントンもえらいがジョージ少年もえらい。』

出雲大社

『出雲大社は由緒の深いお宮だ。』

蜜柑山

『蜜柑山の情景は何ともいへない。』

鎌倉

『鎌倉はゆかしいところだなァ。』

月光の曲

『ベートーベンは流石に大家だ。』

十和田湖

『十和田湖はめづらしい湖だ。』

小さなねぢ

『僕もほんたうに役に立つてゐるのだ。』

リヤ王物語

『リヤ王はかはいさうな人だ。』

釋迦

『釋迦の生涯は尊いものだなァ。』

奈良

『奈良はゆかしいところだ。』

青の洞門

『禪海の人格は實に偉大だ。』

電氣の世の中

『今の世は電氣の世の中だ。』

舊師に呈す

『舊師がおなつかしい。』

我が國民性の長所と短所

『大國民としての覺悟が大切だ。』

といつた如何にもあつけないものになるであらうが、それは致方もないことである。たゞそれが文意に殺到する自然の勢ひから生れたものであつたら、形はよし概念的なものであつても、その中には不可視的な現實――言語に絶した――が疊

み込まれ、具體的な心情が渦卷いてゐるのを否定するわけには行くまい。したがつて『一つとりたいなァ』とか『賴光はえらい』とか『お花はいゝ子だ』とかいつた素朴な情感も、內實においては決して無內容なものではない。殊に幼稚な學年、例へば

卷二

オキヤクアソビ
犬ノヨクバリ
モチノマト
ハナサカヂヂイ

卷三

ゆびのな
うらしま太郎
一口ばなし

カウモリ
はごろも

巻四

日と風
お話二つ
一本杉

の如きは、單に『面白かつた』とか『かはいさうだ』とか『をかしいなァ』とかいふのがやつとで、多くはただ首肯くか、微笑むか、手をたゝくかするのが普通であらう。これらは何れも場合々々に應じてその態度や表情に着目するのは勿論のこと、特に子供の讀みにあらはれる節奏――言葉の律動――に注意してその理解習得の程度を識別することを忘れてはならない。

文意の誘致を目的とする發問においても、普通何が書いてありましたか。

どんなことが書いてありましたか。

何がどうしたことを書いてありましたか。

どんな感じがしますか。

どう思ひますか。

どう感じましたか。

といつた形で行はれてゐるが、これとて一度子供の自然や個性の相違に想到するとき、それらが果して妥當したものといへるかどうか。殊に或種の文に對する教師の發問が、『何が書いてありましたか』によつてされた場合と、『何を感じましたか』によつてされた場合とは、文意表明の上に大なる相違を來すことは經驗あるものゝ否定しがたいところであらう。

何が書いてありましたか。

には理知的側面の答が酬いられ、

何を感じましたか。

には情緒的側面の答が誘發される。かやうに最初から知的に又は情的に――教

師の獨決で――出發することが、文意の表明を誘致する上に妥當したものであるかどうか。そこにも大きな問題が横たはつてゐる。

理知的に出るか、情緒的に出るかは、讀む個性の然らしめるところで、我々はどこまでも子供の自然を尊重し、その自由を拘束してはならない。でないと折角築き上げた想の形を破壞してしまふ恐れがないともいへない。だから最初の發問は成るべく包容的な暗示性に富んだもので、子供の個性の活躍を自由ならしめるやうなものでなければならない。一通讀ませた後に

何が書いてありましたか。

と聞けば必定

ツバメのことが書いてあります。

とか、

もちつきのことが書いてあります。

とかいつた題目そのまゝのものか、

ツバメは飛ぶことが早い。

とか、

ツバメは渡り鳥で、人の役に立つ鳥だ。

とかいつた内容を要約した――普通に大意といはれてゐる――理知的のものしか得られない。

どう感じましたか。

どう思ひますか。

といつた發問も同樣に

もちつきは面白いと思ひました。

とか、

にいさんが餅をつくのがをかしい。

とかいつた思付半分の答しか得られまい。むろんさうした答をもとにして、

どこが面白いか。

どうしたのがをかしいか。

といつた風に、漸次に問ひを進めることも出來るであらうが、もと〳〵不自然で整

理されてゐない發問に的確な答の得られようぶがない。かゝる教式の當然の結果として、兒童はいつも受身の位置にあつて、一時間中教師の問ひにあやつられながら引づり廻はされるやうなみじめさを見ることが屢々である。

子供の個性を活躍させ、讀み得た文意を自由に表明させる機會を與へるためには、漠然とした問ひではあるが、

どうでしたか。

とか、

何がわかりましたか。

とか、

どう讀みましたか。

といつた包容的な暗示性に富んだものか、

どこをどう見てゐるか。

とか、

どういふ點に一番力を入れてゐるか。

といつた、本質的な直ちに文意に殺到し得るやうなものがいゝ。

かうして讀み得たことを話させたり、書かせたり、時には互に討議させたりして、めい〳〵の考へを何のこだはりもなく、自由に表明させるやうに仕向けることが肝要である。特に三四年以上の子供には、話合又は討議の形で、各自の意見を自由に發表し合ふ機會を與へることは、讀文の態度を馴致する上からいつても、自己自身を確立する上からいつても、頗る望ましいことである。

三

文意のとりかた　私たちは作者をはなれて文を單獨に考へることが出來ない。これはラヂオを聽取するときの態度を反省して見ればすぐ分ることである。ラウド・スピーカから漏れて來る音波を、相手を想像しないで聽く人があるであらうか。よしそれが想像した人とちがつてゐようがゐまいが、とにかく話者を想像しないではゐられまい。文を讀む場合もやはり同樣で、文字語句をたどる間に油然として浮び出るものは作者のそれでなければならない。例へば國讀卷一の

アメ　ガ　ヤミマシタ。
ヒ　ガ　テリダシマシタ。
スズシイ　カゼ　ガ　フイテ、　ヨイ　ココロモチ　デス。

の如き幼稚な文でも、作者をはなれては意味をなさない。『アメ　ガ　ヤミマシタ』といひ、『ヒ　ガ　テリダシマシタ』といひ、そこには語る人と、語るべき或何ものかゞ存在してゐなければならない。學年が學年であるから、こゝでは挿畫を配して讀解を容易にしてはゐるが、言葉を手繰つて作者の想を掴むことが出來なかつたら、この文の文意である『ヨイ　ココロモチ』を感得することは出來まい。

卷二の『月』も取扱はれてゐる素材は月だが、月によつて觸發された作者――こゝでは姉さんと呼びかけてゐる子供――の情感は、姉に見せたいといふ純情の發露でなければならない。『ネエサン、デテ　ゴラン　ナサイ、』の呼びけから、『モウ　スッカリ　木　ノ　上　ヘ　デマシタ。』と姉に訴へる眞情、さては『コチラノ　クライ　モリ　ノ　中　ニ　ミエル　ノ　ハ、ドコ　ノ　ウチ　ノ　アカリ　デセウ。』と界隈を見まはして話しかける心もちなど、文の表現面をたどりな

がら、その奥底に流れ動いてゐる心のすがたをじつと見つめてゐると、そこには姉おもひの弟の、純粹無垢なかはいゝ姿が、くつきりと心のカメラに燒付けられるではないか。かくして『デハジメマシタ』『ダンダン　アカルク』『スッカリ』『一メンニ　アカルク』『ヒル　ノ　ヤウ　デス』などの語句が、刻々に移りかはる月夜の情景を想像させると同時に、それに觸發されて動く作者の心のすがたを捕捉する大切な契機となつてゐることに氣付くであらう。

(A) ネエサン、デテ　ゴラン　ナサイ、月　ガ　デハジメマシタ。マツ　ノ　木　ノ　アヒダ　ガ　ダンダン　アカルク　ナッテ　キマス。
(あ、きれいな月が出たよ。姉さん、早く出てごらん。)

(B) モウ　スッカリ　木　ノ　上　ヘ　デマシタ。一メンニ　アカルク　ナッテ、ヒル　ノ　ヤウ　デス。
(もうすつかり出たよ。このあかるさはどうです。まるでひるのやうだね、姉さん。)

(C) コチラ ノ クライ モリ ノ 中 ニ ミエル ノ ハ、ドコ ノ ツ
チ ノ アカリ デセウ。
(あれ、あの森の中にちら〳〵見えてゐるのは、どこのあかりでせう。)

すべては『姉さんに見せて喜ばせたい』といつた弟――作者――の純眞な氣持で統一され統率されてゐる。

(A)には早く〳〵と如何にもせきこんだ樣子が見える。(B)には姉と一緒に美しい月を眺める心のよろこびが想像される。(C)には仲のいゝ兄弟の、如何にもなごやかな、うちくつろいだ有樣が思ひうかべられる。この場合、月は感情觸發の機緣をなすのみで、文の本質そのものからいふと、月であらうが何であらうが、そんなことは問ふところではない。

次の『クリヒロヒ』もやはりさうで、素材は田園趣味にみちた栗拾ひであるが、文の內面を統一してゐる想のかたちは、『友達にも拾はせて喜ばせたい』といふ、純眞な友情の發露と見なければならない。

『コノ 山 ニハ、クリ ノ 木 ガ タクサン アリマス。ユフベ カゼ ガ フイタカラ、キット クリ ガ オチテ キマス。サガシテ ミマセウ。』
(友達に拾はせたら、どんなにか喜ぶことだらう。)

『モウ 人 ガ ヒロツタ ノカ、サツパリ アリマセン。
(落ちちやゐないじやないか……と友達の輕い反駁と失望、)

『ソレ デハ ムカフ ニ 大キナ 木 ガ アリマス カラ、アノ 木 ノ 下 ヘ イツテ ミマセウ。』
(何とかして拾はせて喜ばせたい。)

子供は二人、誘ひかけてゐる子供は『キツト クリ ガ オチテ キマス』と斷言してゐるところから見ると、この附近のものでこゝらの地理にも詳しいものと見える。誘はれてゐる今一人の子供は、この地方の事情にもくらく、土地にもなれない子供らしい。それは『コノ 山 ニハ、クリ ノ 木 ガ タクサン

アリマス』と敎へられてゐるのを見ても分る。二人は今、栗の林に分入つて、落ちた栗をあさりあるくのであるが、あやにくと落ちてゐる筈の栗が落ちてゐない。それで誘はれた方の子供は失望して、『サッパリ　アリマセン』と落膽する。誘つた方の子供は心配して、『ソレ　デハ　ムカフ　ニ　大キナ　木　ガ　アリマス　カラ、アノ　木　ノ　下　ヘ　イッテ　ミマセウ。』と、更に新しい方面へと友達を連れて行く。かうして文の奥底に流れ動いてゐる想のすがたを内視して見ると、友達に拾はせたらどんなに喜ぶだらう……何とかして拾はせて見たいなア……といつた純眞な氣持で一貫されてゐる。これがこの文の文意であり、文の本質そのものなのである。これに對して栗拾ひなる事實は、必然的なものではなく、全く偶然的なものであり、疑へば疑ひ得るものである。我々はこの事實――偶然性――を通して、その奥に内在する本質そのものを見出さなければならない。いふところの本質は、事實の先天的構成要素であつて、事實をして事實たらしめるものである。文の讀解はかゝる本質把捉を意味し、その本質性と偶然性の内的契機を見出すところに讀方指導の鎖鑰が秘められてゐる。私はこれから國語

讀本の中に適例をもとめて、文意把捉の大體を説明することにする。

その一　きやうだい（國讀卷三）

ゆふべ　の　雨　で　くさ　や　木　の
みどり　いろ　ます　なつ　の　あさ、
つつみ　かかへて　がくかう　へ
つれだち　いそぐ　あね　おとと。
足　すべらせて　こけかかる
おとと　を　かばふ　あね　の　うで。
かばふ　はずみ　に　あね　は　また
足だ　の　はなを　ふつつりと。
『ねえさん　これ　を　あげます』と、
こし　に　はさんだ　手ぬぐひ　の
はし　ひきさいて　さし出せば、
『正さん　これ　は　ありがたう。』
あね　は　手ばやく　を　を　たてて、
小川　の　水　で　手　を　あらひ、

『さ、いきませう。』と　きやうだい　は
がくかう　さして　いそぎゆく。

姉は弟をかばひ、弟は姉をおもふといふ、この美しい友情がねらひどころである。あねといひおとといつてゐるところから見て、作者は兄弟以外の第三者であることはむろんであらう。

昨夜の雨で急に面目一新、緑の色が濃くなつた山の木々、それらにはまだ雨の名殘の露の玉がきら〳〵光つてゐる。すが〳〵しい朝のこと——

見る目も羨しいほど仲のいゝ兄弟が、何か語らひながら並んで學校へと急ぐ。と、話に氣をとられた弟が、ぬかるみ道をするりとすべつて、よろ〳〵と轉げかゝる。あッと姉が素早く手をかす拍子に、これはまた——今度は姉の足駄の鼻緒がぷつつりと切れてしまつた。

『おや』と姉は思案氣に足をのぞきこんだ瞬間、『姉さん、これを上げます』と、弟はもう腰にはきんだ手拭を引き裂いて出してゐる。

『正さん、これはありがたう』と、姉は手早く緒をたてゝ、汚れ手を側の小川で洗ひ

清め、『さ、いきませう』とにつこり顔見合せて又學校へと急ぐ——

讀んでゐるうちに自然と仲のいゝ姉と弟のすがたが目前に浮び出る。さうして『なんて仲のいゝ兄弟だらう。』とか、『本當に感心なものだ。』とかいつた感じは誰しも起るにちがひない。これがこの詩の精神で、作者の意圖も亦そこにある。

その二　フクロフ　（國讀卷四）

フクロフハ　オモ白イ　カツカウノ　鳥デス。フクレタ　カラダ、マンマルナ　目、カホハ　ネコノ　ヤウデ、其ノ上ネズミヲ　トツテ　クフノデ、ネコ鳥トイフ　トコロモアリマス。

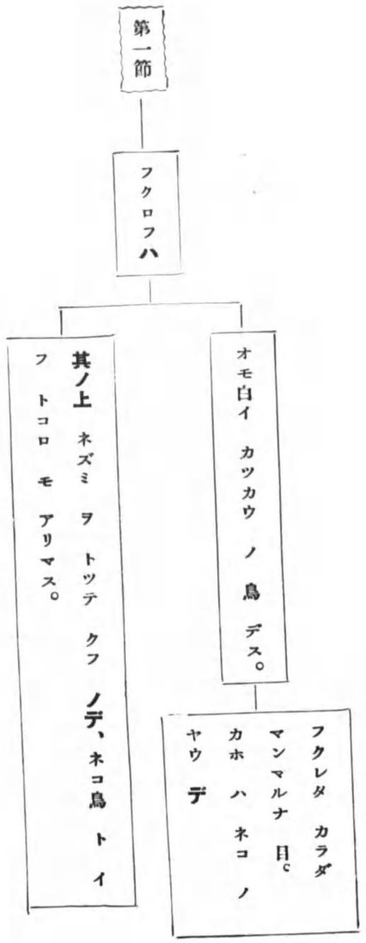
夜ニナルト、ホカノ鳥ハ　大ガイ　目ガ　見エナクナルノニ、此ノ鳥ハ　見エルノデ、ホカノ鳥ヲイヂメタリ、ツカミコロシテ　エニシタリシテ　アバレマハリマス。其ノ中ニ夜ガ明ケルト、目ガ見エナクナルノデ、森ヤ林ノヒクイ木ノ枝ニトマツテ、ボンヤリト　シテ居ルコトガ　アリマス。

スルト　ホカノ鳥ガ　見ツケテ、『ア、ニクイ　ヤツガ　居ル。』

ト イハナイ バカリ ニ、ヨツテ タカツテ イヂメカヘシマス。
鳥 ハ 大キナ コエ デ ワル口 ヲ イヒ、太イ クチバシ デ
ツツキマス。
モズ ハ 小サイ ガ、マケヌ氣 ノ 鳥 デス カラ、高イ 所
カラ トンデ 來ガケ ニ、フクロフ ノ カホ ヲ ケツテ、『キイ
キイ』ト カチドキ ヲ アゲマス。スズメ ハ ヨハイ 鳥 デス
ガ、ソバ ヘ ヨツテ、ヲドツタリ サヘヅツタリ シテ バカニ
シマス。ソレ デモ フクロフ ハ シ方 ガ ナイ ノデ、大キナ
目 ヲ 見ハツテ キヨトキヨトシテ 居ル バカリ デス。
フクロフ ノ 鳴キゴエ ハ 所 ニ ヨツテ イロイロ ニ イヒ
マス。フクロフ ガ 鳴クト、其ノ 明クル 日 ハ 天氣 ガ ヨ
イ カラ、『ノリツケ ホウセ』ト 鳴ク ノ ダト イフ 所 モ
アリマス。

編纂趣意書には理科的教材と銘をうたれてゐるが、そんなことはどうでもいゝ。それよりもかうした素材を取入れて、それを文にまで生長させた作者の意圖を忖度して見なければならない。編纂者は文の主眼は鳥をはじめとして、百舌鳥・雀な

どの習性をといたところにあるといつてゐるが、これは恐らく文の外面的素材的方面を主としていつたもので、この文を文たらしめた、文の內面的方面——內在的對象——を說明したものではあるまい。私たちが知らんと欲するものは、そんな素材的方面ではない。私たちは今それを文に聞かなければならない。



第二節

夜ニナルト

ホカノ鳥ハ大ガイ日ガ見エナクナルノニ、此ノ鳥ハ見エル**ノデ**、

ホカノ鳥ヲ イヂメタリ、ツカミコロシテ エニシタリシテ アバレマハリマス。

其ノ中ニ夜ガ明ケル**ト**、

日ガ見エナクナル**ノデ**、森ヤ林ノヒクイ木ノ枝ニトマツテ、ボンヤリトシテ居ルコトガアリマス。

スルト ホカノ鳥ガ見ツケテ、……タカツテ イヂメカヘヨツテ シマス。

鳥**ハ**……
モズ**ハ**……
スズメ**ハ**……

ソレデモ フクロフハシカタガナイノデ、大キナ目ヲ見ハツテ キヨトキヨトシテ居ルバカリデス。

第三節

フクロフノ鳴キゴエ**ハ**

所ニ**ヨツテ** イロイロニイヒマス。

フクロフガ鳴クト、其ノ明クル日ハ天氣ガヨイカラ、……

かうした思想關係を吟味して見ると、言葉――太字の如き――が作用を生み、作用がまた作用を生んで、自らそこに幾つかの想のまとまりが出來、それがだん〳〵集まり集つて、遂に一語に壓搾される。即ち、

鳥は↓面白い鳥だなア

第一節……面白い恰好の鳥だなア。

第二節……ほかの鳥とまるきりちがつたふしぎな鳥だなア。

第三節……鳴聲も面白いなア。

かくして得た『面白い鳥だなア』はこの文の文意で、文のすべてはこの一語によつて統率されてゐる。

その三　八幡太郎（國讀卷五）

八幡太郎義家が或日安倍宗任をつれて廣い野原を通りますと、狐が一匹とんで出ました。義家はせ中のうつぼから、かりまたをぬいて狐を追つかけました。いころすのもかはいさうだと思つて、兩耳の間をねらつて、頭の上をすれ〳〵にいました。矢は狐の鼻のさきの地面につつ立つて、狐はころりとたふれました。

かけよつて見て、宗任が

『矢はあたつて居りませぬのに、狐は死んで居ります。』

と言ふと、義家が

『びつくりしてたふれたのだ。ほつて置け、今に生きかへる。』

と言ひました。

さて宗任がかりまたをぬき取つて、義家にかへしますと、義家はせ中をくるりとむけて、うつぼへさゝせました。かりまたは、矢じりがつばめの尾のやうにわれた、たいそうするどい矢で、宗任はつい此の間義家にからさ

んしたてきの大將なのです。

『あぶないことだ。もし宗任に惡い心があつたら。』

と、義家の家來どもはひや〳〵したといひます。

この文は讀本の中でも難教材の一つで、見方によつて文が二つに分裂して統一がつかなくなる。前半の狐を射た話と、後半の宗任に背中をむけて雁股をさゝせた話とが、『さて』の一語で結び合はされてゐるが、これを對立したものと見ると、前後の二事件に統一がなくなる。しかし内省による想のすがたを——

八幡太郎が
↓
或日廣い野原で狐を射た
↓
さて
↓
宗任に背中をむけて雁股をさゝせた。
↓
家來どもはひや〳〵した。

のやうに一線上に凝視することが出來たら、『家來どもはひや〳〵した』を契機として、武勇大度であつた義家の風貌を直視することが出來るであらう。かくして得たる『八幡太郎義家はえらい大將だなア』といつた文意は前と後とを一貫し、文のすべてを統率していさゝかも動搖を與へない。

義家を武將として、將又一個の人間としてながめたら、この外にまだいろ〳〵の見方もあるであらう、しかしこゝではそれは問題ではない。それよりもこの文の作者が八幡太郎のかうした一面を捉へて、これを文に取入れなければならなかつた理由を考察して見なければならない。それには先づ何より文の制約を遵奉するはいふまでもなく、いやしくも埒外――いはゆる敷衍補説といふ如き――に走ることは絶對に避けなければならない。どこまでも純な氣持で直ちに作者のふところに飛込み、その心情をたしかめると共に、更に進んでこれを我ものとするの覺悟が肝要である。

その四　賀茂川　（國讀卷六）

京都を北から南へ流れてゐる川を賀茂川といひます。京都は長い間の都ですから、冠をかぶつて太刀をはいたおくげ樣方や、きれいな着物を着て、牛車に乘つたお姫樣方の姿を、此の川の水はいくたびとなくうつしたことでございませう。又いくさのあつた時には、よろひかぶとの勇ましいなりをした武士の刀や、なぎなたの光も、いくたびとなく此の川の水にうつつたことでございませう。こんな人、こんな姿は、とうの昔にきえま

したが、川は昔のまゝに清く美しく流れてゐます。

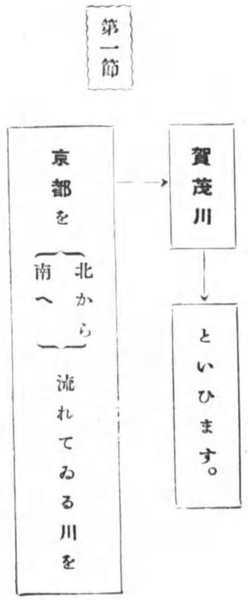
賀茂川には橋がたくさんかけてあります。名高いのは三條・四條・五條の三つの橋でございます。今、三條の大橋に立つて、川下を見ると致しませう。川の西は水のすぐそばから、すき間もなく家が立ちならんでゐます。東の方は此の橋のたもとから、川にそつて電車が出ます。此の電車道から東山のすそへかけて、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、青い松の間に、五重の塔や大きな寺の屋根が見えます。四條の大橋はすぐ其所に見えます。人通の多いのは此の大橋で、これには電車も通つてゐます。義經・辨慶の五條の大橋は、此の川下にかゝつてゐるのでございます。又三條の大橋から川上を見ると、川原が遠く北につゞいて、其のさきにやさしい姿の山がかすんで見えます。

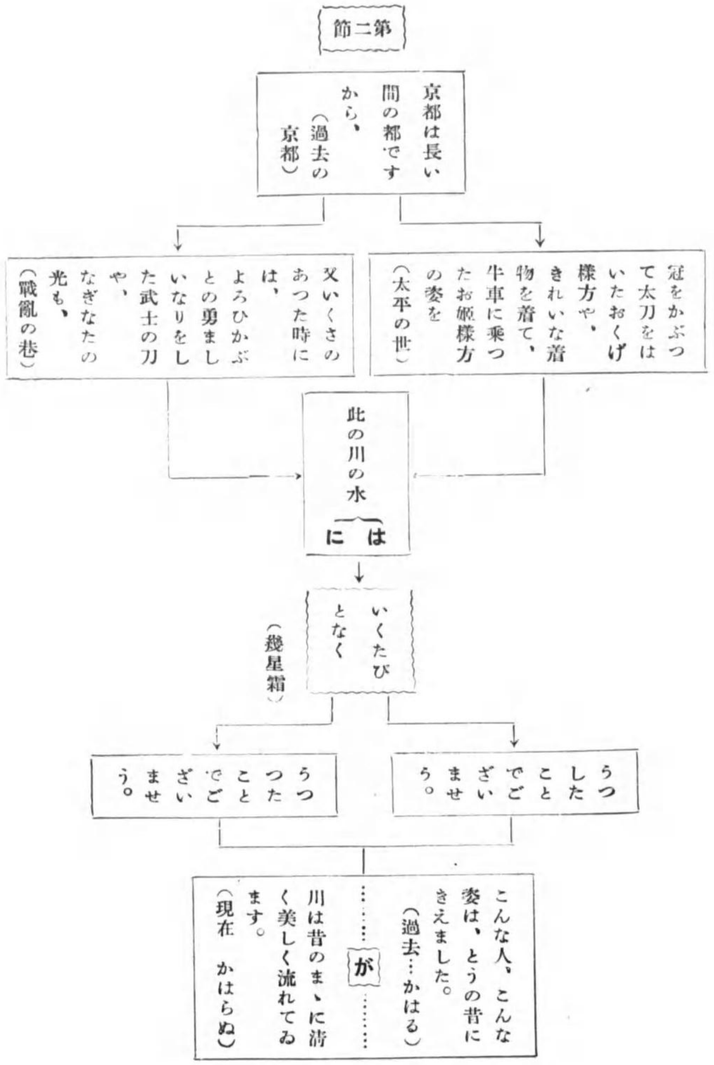
賀茂川は水が多くないので、船は通りませんが、其の代りに水がいたつてきれいで、染物にむいてゐます。あの美しい友禪染は、もと此の川べりで出來たのでございます。

素材は編纂趣意書にも示されたやうに、地理的のそれであるが、さうした素材を取入れてこれを文にまで生長させた作者の意圖はどこにあるであらう。私たちはそれを確めるために、先づ一切の先入觀――成心――を捨てゝ、純な氣持で文に

面接して見なければならなかつた。

この文を讀んで、第一にぴんと來るのは『京都』の一語である。京都は舊都であつて山紫水明をもつて知られてゐる。しかしてその水明は一に賀茂川があるからである。が、同時に又賀茂川をして、しかく名高からしめたものは京都であるともいへる。京都と賀茂川は相關々係にある。これ作者が『京都を』『京都は』と疊みかけ、『川の水は』『川の水に』と繰返してゐる所以で、想の形も亦自らそこに孕まれてゐる。





かくして第三節に入り、作者は三條の大橋に立つて、現在の京都の展望を叙し、更に河水の清冽に說き及ぼしてゐる。

三條の大橋に立つて
- 川下
  - 西の方
  - 東の方
- 川上……

展望……（現在の京都）

第三節

賀茂川は……
- 水量が少いので船の便はない。
- が
- 其の代りに水がきれいで、染物にむいてゐる。

友禪染……（美術の都）

むすび

かうして想の形をぢつと見つめてゐると、自ら一點に凝集して、作者の意圖するところを明確に意識することが出來る。卽ち『こんな人、こんな姿は、とうの昔にきえましたが、川は昔のまゝに清く流れてゐます。』がそれで、かはる過去――昔――とかはらぬ現在――今――とを對照させて、賀茂川に對する低徊趣味を鼓吹し

たところにいふにいへない味がある。

その五　一太郎やあい（國讀卷七）

日露戰爭當時のことである。軍人をのせた御用船が今しも港を出ようとした其の時、

『ごめんなさい。〳〵。』

といひ〳〵、見送人をおし分けて、前へ出るおばあさんがある。年は六十四五でもあらうか、腰に小さなふろしきづつみをむすびつけてゐる。御用船を見つけると、

『一太郎やあい。其の船に乘つてゐるなら、鐵砲を上げろ。』

とさけんだ。すると甲板の上で鐵砲を上げた者がある。おばあさんは又さけんだ。

『うちのことはしんぱいするな。天子樣によく御ほうこうするだよ。わかつたらもう一度鐵砲を上げろ。』

すると、又鐵砲を上げたのがかすかに見えた。おばあさんは『やれ〳〵』といつて、其所へすわつた。聞けば今朝から五里の山道を、わらぢがけで急いで來たのださうだ。郡長をはじめ、見送の人々はみんな泣いたといふことである。

題目の『一太郎やあい』に作者は既に文意の象徴面を見せてゐる。『一太郎やあい』と呼びかけた人は誰か、『一太郎やあい』と呼びかけられた人は誰か、これは題目を見ただけで讀者が課せられた課題であつて、讀者と作者との交渉の契機はこに孕まれてゐるともいへよう。かうして作者は、それが日露戰爭當時のことで、軍人をのせた御用船が今しも港を出ようとしたその時の出來事であつたことを感激しきつた態度で物語るのであるが、それを文に聽く讀者もまた、いつか知らその抒情精神に魅せられて、我を忘れて感激する。この場合、我もなければ人もない。たゞ一太郎母子があるばかりである。

『ごめんなさい。〳〵。』

『一太郎やあい。其の船に乘てゐるなら、鐵砲を上げろ。』

『うちのことはしんぱいするな。天子樣に御ほうこうするだよ。わかつたらもう一度鐵砲を上げろ。』

『やれ〳〵。』

『ごめんなさい。〳〵。』といひ〳〵、見送人をおし分けて前に出たおばあさんが、『やれ〳〵』といつてそこへすわるまでたゞこれ至誠、我、人共に眞に涙ではないか。結びの『郡長をはじめ、見送の人々はみんな泣いたといふことである』とある『みんな泣いた』は文意のあらはれで、作者の意圖もまたこゝにあるであらう。

――編纂者はいふ、『事實です。この事實談を語る人も泣きました。聽いた人も泣きました。教へる方も泣かれませう。教はる兒童も泣きませう。一太郎君の母は彼の「水兵の母」と等しく健氣な日本婦人の代表者です。』……

……と、

その六　塙保己一　（國讀卷八）

目は見ゆれども、字のよめざる人をあきめくらといふ。昔はあきめくらも多かりしに、まことのめくらにして、大學者となりし人あり。塙保己一これなり。

保巳一は五歳の時めくらとなりしが、人に書物をよませて一心に之を聞き、後には名高き學者となりて、多くの書物をあらはせり。

保巳一の家は今の東京、其の頃の江戸の番町にありて、多くの弟子保巳一につきて學びたれば、時の人

番町で目あきめくらに道をきゝ。

と言ひたりといふ。

或夜弟子をあつめて、書物を敎へし時、風にはかに吹きて、ともし火きえたり。保巳一はそれとも知らず、話をつゞけたれば、弟子どもは

「先生、少しお待ち下さいませ。今風であかりがきえました。」

と言ひしに、保巳一は笑ひて、

『さて〳〵、目あきといふものは不自由なものだ。』

と言ひたりとぞ。

これも難敎材の一つで、多くの實際家からユーモアの敎材と解せられてゐる。が、果してこれがユーモアであらうか、成程文を外面的にながめると、冒頭に『目は見ゆれども、字のよめざる人をあきめくらといふ。』といつた、明盲の定義みたやうなものがあり、中ほどには『番町で目あきめくらに道をきゝ』といふ川柳があり、

結びには『さて〳〵、目あきといふものは不自由なものだ。』といつた、一見皮肉と思はれる警句があるので、これをユーモアと見るのも無理ではないかも知れない。

――原據である三養雜記もさうなつてはゐるが――だが一たび文の內面に徹しそこに形づくられる想の形を內視することが出來たら、作者の意圖が『字のよめざるあきめくら』と『めくらの大學者』とを對照させて肉眼に對する心眼のたふとさを說いたところにあることを知るであらう。かくして第一節における

『まことのめくらにして、大學者となりし人あり。』

第二節における

『人に書物をよませて、一心に之を聞き、』

第三節における

『番町で目あきめくらに道をきゝ。』

第四節における

『さて〳〵、目あきといふものは不自由なものだ。』

などが中心句となつて、重要な位置を占めることになる。その『番町で云々』の川

柳の如きも、句そのものは矛盾のユーモアをねらつたものではあるが、こゝでは却つて人間能力の偉大さを暗示し、人間靈性の不思議さを物語つたことになる。殊に結びの『さて〳〵、目あきといふものは云々』は文意のあらはれとして、この文を統率したものといへよう。彼は心眼をひらき得た喜び、いはゆる法悅に浴してゐるのである。しかもその喜びを私するに忍びず、これを他の迷へる人々に及ぼさうとしてゐるのである。この心境は恰も悟道した釋迦が、その喜びを一切の衆生に及ぼさうとしたのと同一で、佛心の發露、大慈悲心の露顯でなくて何であらう。『先生少しお待ち下さいませ。今風であかりがきえました。』といつた弟子達に對して、『さて〳〵、目あきといふものは不自由なものだ。』といつた。この『目あき』こそ卽ち『目は見ゆれども、字のよめざる人』なのである。

たの七　動物ノ色ト形　（國讀卷九）

多クノ動物ヲ注意シテ見ルトイロ〳〵珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。

中デモ面白イノハ、或動物ノ體色ガマハリノ物ノ色ニ似テキルコトデアル。コンナ體色ヲ保護色トイフ。保護色ヲモツテキルト、マハリノ色ニ

マギレテ、容易ニ他ノ動物ニ見ツケラレナイ。シタガツテ敵ニオソハレル心配モ少ク、又コチラカラ敵ヲオソフノニモ都合ガヨイノデアル。

保護色ノ例ハイクラモアル。田ニ住ム土蛙ハ土色、木ノ葉ニ宿ル雨蛙ハ綠色。黃色ナ蝶ハ菜ノ花ニムラガリ、白イ蝶ハ大根ノ花ニ集ル。沙漠地方ニ居ルラクダハ灰色デ、雪ノ中ニ住ム北極熊ハ眞白デアル。

保護色ヲモツテキルモノノ中ニハ、季節ニヨツテマハリノ物ノ色ガカハレバ、ソレニツレテ同ジヤウナ色ニカハルモノモアル。北國ニ住ム野ウサギヤ高山ノ上ニ居ル雷鳥ハ、夏ハ褐色デ、枯葉ヤ土ノ色ニ似テキルガ、冬ニナツテ雪ガ降リツモルト、眞白ニナル。又季節ニヨツテカハルクラキデナク、何時デモマハリノ物ノ色ガカハレバ、間モナクソレト似タ色ニカハルモノモアル。例ヘバ雨蛙ハ綠色ノ葉ノ上ニ居ル時ハ綠色デアルガ、枯木ニ移レバ枯木ニ似タ色ニナル。

保護色ヲモツテキル上ニ、其ノ動物ノ姿勢ニヨツテ、形マデマハリノ物ニ似テ見エルモノモアル。桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、其ノ色ガ桑ノ木ニ似テキルバカリデナク、體ノ後ノ端ヲ木ニツケテ、體ヲナヽメニツキ出スト、形ガ桑ノ小枝ニ寸分違ハナイ。所ニヨツテ此ノ蟲ヲドビンワリト呼ンデキルノハ、農夫ナドガ小枝ト見違ヘテドビンヲ掛ケ、落シテワルトイフ意味デアラウ。又沖繩ニ產スル木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ

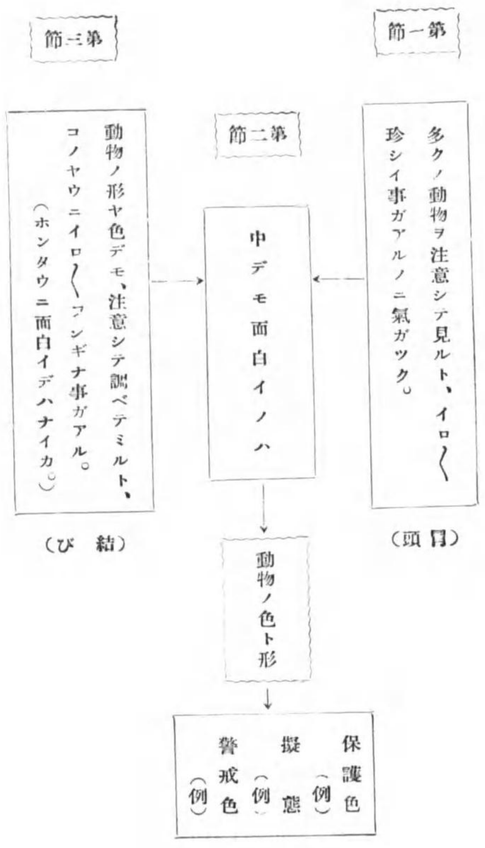
美シイ色ドリガアルガ、裏ハ枯葉ニ似テキルノデ、羽ヲトヂテサカサニ草木ノ枝ニ止ッテキルト、マルデ枯葉ガ引掛ッテキルヤウニ見エル。シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出来テキルノハ、印度ニ產スルカマキリノ一種デアラウ。此ノ蟲ハ主ニ蘭ニ止ッテキテ、外ノ蟲ヲトッテ食フモノデアルガ、羽ヲ廣ゲテキルト、全ク蘭ノ花ト同ジヤウデ、ナカ〳〵見分ケガツカナイサウデアル。

又或動物ハ保護色トハ反對ニ、マハリノ物トマギレナイヤウナ鮮カナ體色ヲモッテキル。コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐レル武器ヲソナヘテキルカ、イヤガル味ヤニホヒノアルモノデ、之ニ近ヅカウトスルモノガナイカラ、タヤスク見トメラレル方ガカヘッテ安全ナノデアル。此ノ類ノ色ヲ警戒色トイフ。例ヘバ毒ヲモッテキル蜂ノ體色ガ黃ト黑ノダンダラニナッテヲリ、惡味ヤ惡臭ノアル蝶ノ羽ハ美シイ色ドリガアルヤウナモノデアル。

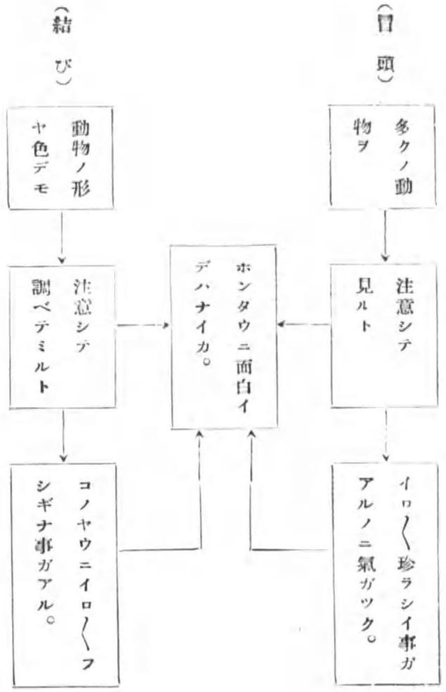
動物ノ形ヤ色デモ、注意シテ調ベテミルト、コノヤウニイロ〳〵フシギナ事ガアル。ホンタウニ面白イデハナイカ。

この教材も誤解されがちな教材であるが、これが果して理科的知識を目的としたものであらうか、私たちは先づすべての先入觀を捨てゝ純な氣持で文に直面し

て見なければならない。さうしてそこに内省せられる想の形は果して何を物語ってゐるであらうか。



冒頭の一節と結びの一節とは、中の具體例をさしはさんで相對してゐる。



冒頭の『注意シテ見ル』と結びの『注意シテ調ベル』とが互に呼應しあつて、『ホンタウニ面白イデハナイカ』といつた神秘感を生み出してゐる。

我々はふだんいろ〳〵なものを見てゐるが、何の氣なしにそれを見過してゐる。しかし注意して見ると、――心眼が開くと――木の葉の落ちるのにも意味があり、點滴い石を打つ音にも何等かの啓示がある。花が咲き、鳥が啼くそれが宇宙の神

秘でなくて何であらう。作者はそれを『珍ラシイ』といひ、『フシギ』といひ更に『面白イ』といつてゐる。つまり作者は、この事實――動物の色と形――を通してその奥に内在してゐる自然の神秘、天然の妙理を認めてゐるのである。

我々はこゝにはじめて作者の意圖を明かにすることが出來た。と同時に、この教材が世の多くの人がいふやうに、理科的知識を目的としたものでもなければ、保護色や警戒色などを知らせるためでもないことを知つた。

――素材の質は全然異つてはゐるが、本質的には却つて前にあげた『塙保巳一』と同一種類に屬してゐる。――

尤もかうはいふものゝ、文の大部分を占めてゐる理科的説明を全然顧慮する必要がないといふのではない。それは作者の意圖を摑む上からいつても、讀者の頭腦を明晰にする上からいつても、當然讀解の中心となるべきはいふまでもない。たゞそれが單獨な事柄としてではなく、想の奥底から生れ出た説明精神の發露としてでなければならぬといふだけである。試みにその説明の仕方を圖表にして見ると、

- 保護色
  - 説明
    - 體色ガマハリノ物ノ色ニ似テヰル
      - 容易ニ他ノ動物ニ見ツケラレナイ
        - 敵ニオソハレル心配モナク
      - 敵ヲオソフニモ都合ガヨイ
    - 田ニ住ム土蛙……土色
    - 木ノ葉ニ宿ル雨蛙……綠色
    - 萃ノ花ニムラガル蝶……黃色
    - 沙漠地方ニ居ルラクダ……灰色
    - 雪ノ中ニ住ム北極熊……眞白
  - 例
    - 特例
      - 季節ニヨツテカハルモノ
        - 北國ニスム野兎
        - 高山ニ居ル雷鳥
      - マハリノ色ニシタガツテカハルモノ……雨蛙
- 擬態
  - 説明……保護色ヲ持ツテヰル上ニ、形マデマハリノモノニ似テ見エル
  - 例
    - 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリ（ドビンワリ）
      - 色……桑ノ木ノ色
      - 形……桑ノ小枝ニ寸分違ハナイ
    - 沖縄ニ產スル木ノ葉蝶
      - 色……羽ノ裏ハ枯葉色
      - 形……枯葉ガ引掛ツテヰルヤウ
    - 印度ニ產スルカマキリノ一種……色モ形モ全ク蘭ノ花ト同ジヤウ
- 警戒色
  - 説明
    - マハリノ物ノ色トマギレナイ鮮カナ體色ヲモツテヰル
    - タヤスクミトメラレル方ガカヘツテ安全デアル
      - 武器ヲモツテヰル
      - 惡味惡臭ヲモツテヰル
  - 例
    - 刺ヲモツテヰル蜂……黃ト黑ノダンダラ
    - 惡味惡臭ノアル蝶……羽ハ美シイ色ドリ

先づ意義を明かにして、それから實例をあげるといふ、いはゆる演繹的な説明の方法も、文意をもとにして考へると、冒頭と結尾に對して最も適當したものといへるであらう。

その八　太陽　（國讀卷十一）

地球上に存在するもので、太陽の影響を受けぬものは一つもない。太陽の光と熱とがなくては、我々人間は勿論、あらゆる生物、一として生存することは出來ない。

これ程我々に重大な關係のある太陽とは、一體どんなものであらう。一口にいへば、白熱の狀態にある一大火球で、之を形造つてゐるものは、液體に近い氣體であらうといふ。さうして其のさしわたしは三十五萬四千里、卽ち地球の百九倍餘りに當り、其の容積は地球の百三十萬倍に當つてゐる。溫度は表面で約六千度、內部に入るに從つて益々高い。光の强さに至つては非常なもので、之を燭光でいへば一三の下に零を二十六もつけて表はさねばならぬ。

望遠鏡で見ると、太陽の表面は全部が一樣にかゞやいてゐるのではなく、光の强い部分もあれば弱い部分もあり、又所々に黑點といつて黑く見え

る所もある。此の黒點は多分表面に生ずるうづ卷であらうといふ。さうして其の數や大きさは、凡そ十一年餘を週期として增減してゐる。

ところが此の大きな太陽も、夜の空に銀の砂をまいたやうに見える小さな星の一つと同じものだといふ。つまり此の宇宙には、あの太陽のほかに、これと同じやうなものがなほ數限りもなく存在してゐるが、たゞ其の距離の遠いために、あんなに小さく見えるのである。しかも我々に最も近いあの太陽でさへ、地球からは凡そ三千八百萬里も離れてゐる。今かりに一時間五十里の速度で飛ぶ飛行機に乘つて行つたとしても、太陽に到着するには八十七年かゝるのである。

この文は嚴密な意味において文意をとらうとすると、やゝ溷濁を感じないわけに行かない。試みに作者の意圖するところを忖度して見ると、太陽を我々の生活と關係させ、我々の生活に重大なる關係あることから說き起して、分る程度で太陽の實體を紹介しようといふにあらうと思ふ。しかし純な態度でこの文に直面して、そこに形づくられる想のすがたを正視して見ると、文の前後に大きな破綻が伏在してゐることを意識しないではゐられない。先づ前半においては冒頭先づ

地球上に存在するもので、太陽の影響を受けぬものは一つもない。太陽の光と熱とがなくては、我々人間は勿論、あらゆる生物、一として生存することは出來ない。

と、太陽が我々の生活に至大な關係あることを說き、更に

これほど我々に重大な關係のある太陽とは、一體どんなものであらう。一口にいへば、白熱の狀態にある一大火球で、之を形造つてゐるものは、液體に近い氣體であらうといふ。云々

から太陽そのものゝ說明に入つてゐる。こゝらは純然たる科學的の說明で、太陽を我々の生活と關係させ、讀者の注意を喚起しながら說明の步を進めたあたりは、如何にも自然で少しの無理をも感じない。然るに後半の

ところが此の大きな太陽も、夜の空に銀の砂をまいたやうに見える小さな星の一つと同じものだといふ。云々

に入つて、想の方向は全く一變して、文の中心は遠く天界の彼方にそれてしまつてゐる。前半の想のはこびからいふと、後半も當然太陽と地球上の生物との關係で一貫されなければならないわけであるが、文は全然それと關係のない宇宙の廣大無邊を說くことに脫線してしまつてゐる。これでは文意のとりやうがない。因つたものである。

こんな教材はやはり思ひつきのまゝに書いたものとして、一通り讀ませた後、適宜問題をとらへて改作させて見るより外にいゝ方法はあるまい。

太陽と地球上の生物との關係
太陽と人生との關係
太陽とはどんなものか
太陽の黑點について
太陽と星の世界
宇宙の廣大無邊なこと

などは差當り問題として好適のものであらう。

文意のとらせかた　文意の把捉はおもに第一次直觀の仕事である。方法として多く通讀によるのを普通とするが、時としては聽寫・視寫、又は他の讀むのを聽取させる場合もある。何れにしても讀むことを中心にして作者の意圖を見極めんとするはたらきを意味するはいふまでもない。今左に二三の實際をあげて說明を試みよう。

その一　五一ぢいさん　（國讀卷三）

村はづれに水車やがあります。村の人は五一車とよんでゐます。五一ぢいさんがその水車やのばんをしてゐるからです。

五一ぢいさんはおもしろいぢいさんです。『からすのなかない日はあつても、五一ぢいさんがうたはない日はない。』と村の人からいはれるほど、いつもきげんよく　うたを　うたふぢいさんです。

長いはんてんを　きて、みじかいももひきを　はいて、こぬかだらけに　なつて　はたらくぢいさんです。

ざぶざぶ　おちる　水　の　おと、とんとん　ひびく　きね　の　お
と、その　にぎやかな　中　から、
『しごと　なされよ、
　　きりきりしやんと、
　かけた　たすき　の
　　きれる　ほど。』
五一ぢいさん　の　うたふ　こゑ　が　きこえます。
いつか　うち　の　おとうさん　が　道で、
『いつも　おたつしやな　こと　で。』
と　おつしやつたら、五一ぢいさん　は
『もう　すつかり　よわりまして。』
と　いつて、大きな　手　で　あたま　を　なでました。
五一ぢいさん　は　ことし　六十九　だ　さうです。

五一ぢいさん(題目)てなんでせう。
〜〜思ひ〳〵に豫想したことをいはせて見る。中には豫習して來たことをいふ子供もあらう。〜〜

隨分變な名前ですね。
では一度讀んでごらん。
　靜かに通讀させる。
　　〜〜〜低音讀〜〜〜
どんなことが書いてありました？
(兒)　五一ぢいさんのこと、
(兒)　五一車のこと、
お書物の繪をごらん。
　〜〜讀本の挿畫を中心にして、讀みの結果をたしかめる。〜〜
どれが五一ぢいさんですか。
五一車といふのは？
どうしてそれを五一車といふのでせう。
(兒)　五一ぢいさん　が　その　水車や　の　ばん　を　して　ゐる　から　です。
　〜〜成べく讀本の文を指摘して答へさせる。〜〜

五一ぢいさんはどんなぢいさんでせう。

(兒) よくうたをうたふぢいさん、

(兒) よくはたらくぢいさん、

(兒) おもしろいぢいさん、

どこでそれが分りますか、

〜〜讀本の文を指摘して答へさせる。〜〜

よくうたをうたふぢいさんといふのは？

(兒)『からす の なかない 日 は あつても、五一ぢいさん が うた
はない 日 は ない。』と 村 の 人 から いはれる ほど、いつ
も きげん よく うた を うたふ ぢいさん です。

よくはたらくぢいさんといふのは？

(兒) 長い はんてん を きて、みじかい ももひき を はいて、こぬ
か だらけ に なつて はたらく ぢいさん です。

おもしろいぢいさんといふのは？

(兒) 五一ぢいさん は おもしろい ぢいさん です。

どこがおもしろいのですか。

〜〜〜こゝまで來れば、よほど文意に接近して來る。〜〜〜

(兒) うたをうたつたり、こぬかだらけになつたりして、……

(兒)『もうすつかりよわりまして』といつて、頭をつるりとなでたりして……

ほんとにおもしろいぢいさんですね。

それではも一度ゆつくり讀んでごらん。

〜〜〜低音讀〜〜〜

〜〜〜靜かに通讀させてから、數名の兒童に讀ませて見る。〜〜〜

〜〜〜個 讀〜〜〜

一ばん面白いと思ふとふところを書取つてごらん。

〜〜〜書 取〜〜〜

ざふざぶ おちる 水 の おと、とんとん ひびく きぬ の おと、

その　にぎやかな　中　から、
『しごと　なされ　よ、
　　きりきりしやんと、
　かけた　たすき　の
　　きれる　ほど。』
五一ぢいさん　の　うたふ　こゑ　が　きこえます。
いつか　うち　の　おとうさん　が　道で、
『いつも　おたつしやな　こと　で。』
と　おつしやつたら、五一ぢいさん　は
『もう　すつかり　よわりまして。』
と　いつて、大きな　手　で　あたま　を　なで　ました。
〜〜〜書取つたのを讀ませて見る。〜〜〜
こんな面白い文を書いた人は誰でせう。

五一ぢいさんでせうか……
(兒)『自分のことを五一ぢいさんなんかいふのはをかしい。
すると誰でせう。……
(兒)『おとうさんと一しよに立つてゐる子供です。
それはどうして分りますか……
(兒)『お書物に『いつか　うち　の　おとうさん　が　道で、「いつも　お
たつしやな　こと　で。」と　おつしやつたら、』とあるので分ります。
どうしてこの子供——作者——はこんな文を書いたのでせう。……書いた
わけがいへますか。
(兒)　おもしろいぢいさんだと思つたから、
(兒)　よくはたらくぢいさんだと思つたから、
(兒)　感心なぢいさんだと思つたから、
では書いた人の氣持になつて、もう一度靜かに讀んでごらん。

〜〜〜低音讀〜〜〜

（通讀後、數名の兒童に讀ませて見る。）

――個　讀――

（場合によつては、教師の範讀を交へるのも面白からう。）

――範　讀――

『いつも　おたつしやな　こと　で』といつたのは誰ですか。

すると五一ぢいさんが何といひましたか。

（兒）もう　すつかり　よわりまして、

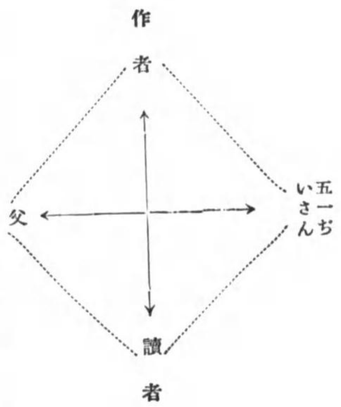
さうしてどうしましたか。

（兒）大きな　手で　あたま　を　なでました。

なぜ頭をなでたのでせう。

（この答はきつと面白いにちがひない。）

それをそばで見てゐた子供――作者――は何と思つたでせう。



五一ぢいさんはいくつになりますか。

（兒）五一ぢいさん　は　ことし　六十九　だ　さう　です。

それは誰がいつたのでせう。

（兒）この文を書いた子供です。

（兒）おとうさんと一緒に立つてゐる子供です。

何と思つていつたのでせう。

（めい〳〵思つたことをいはせて見る。）

（教）そんなお年寄で、朝から晩までこぬかだらけになつて、よく働くなアと感

心したのでせう。

では今日はこれで……

その二　鯉のぼり　（國讀卷五）

ゆふべの雨がはれて、青葉の上に日が氣持よくてつてゐます。さをの先の矢車が、がらがらと鳴ると、鯉が大きな口で、思ふぞんぶん風をのんで、家のむねよりも高く尾を上げます。其の尾を下して來て、さをに着けるかと思ふと、又はらをふくらませて、をどり上ります。其のたびに、鯉のかげが地の上をおよぎます。

鯉のぼり（題目）を知つてゐますか。

（題目にむかつた注意を挿畫にみちびいて、それを讀みの出發點にする。）

お書物のさしゑをごらん。……どれが鯉のぼりですか。

鯉のぼりがどうしたといふのでせう。靜かに一度讀んでごらん。

（自由に通讀させる。場合によつては聽寫させてもよい。）

――低音讀――

さしゑはどこを書いたものですか。

（兒）さをの先の矢車がからからと鳴ると、鯉が大きな口で、思ふぞんぶん風をのんで、家のむねよりも高く尾を上げます。

（兒）ゆふべの雨がはれて、青葉の上に日が氣持よくてつてゐます。……

……

どれが矢車ですか。

矢車がどうしてからからと鳴るのでせう。

風

矢車←

からから

矢車がからく〳〵と鳴ると、鯉がどうするといふのです？

（兒）大きな口で、思ふぞんぶん風をのんで、家のむねよりも高く尾を上げます。

矢車……からく〳〵と鳴る。

風←鯉……大きな口で、思ふぞんぶん風をのんで、家のむねよりも高く尾を上げる。

風が無くなると？

矢車は？

鯉は？

鯉が尾を上げたり下げたりするのはなぜでせう。

風 つよくなると 矢車がから〳〵と鳴る。鯉がはらをふくらませてをどり上る。

よわくなると 矢車の音がしなくなる。鯉が尾を下して來てさをに着ける。

かと思ふと、又……

（兒）ぞんぶん風をのんで尾を上げます。

（兒）はらをふくらませて、をどり上ります。

では風が吹いてゐるといふことをしかと頭において、も一度ゆつくり讀んでごらん。

——低音讀——

一ばんおしまひの『鯉のかげが地の上をおよぎます』といふわけがいへますか。

（兒）かげが地にうつることです。

どうして影がうつるのでせう。

（兒）日が照つてゐるから……

影がうつるのをどうしておよぐといふのでせう。

（兒）鯉のかげが動くから……

動くといはないでおよぐといふのは？

（兒）鯉だからさういつたのです。

誰がさういつたのですか。

（兒）この文を書いた人です。

——作　者——

この文を書いた人はどんな氣持で書いたのでせう。

（兒）いゝ氣持で……

（兒）面白いなァと思つて……

（兒）元氣がいゝなァと思つて……

どこに一番力を入れて書いてゐるでせう。

（兒）鯉の元氣のいゝところ……

（兒）鯉が尾を上げたり下げたりするところ……

（兒）矢車がから〳〵と鳴つて、鯉が大きな口をあけてをどり上るところ。

氣持のいゝ文ですね。ではもう一度讀んでおしまひにいたしませう。

――自由讀――

その三　木下藤吉郎（國讀卷七）

豐臣秀吉がまだ木下藤吉郎といつて、織田信長の草履取をしてゐた時のことである。信長はよく夜明前から馬場へ出て馬を乘りならした。毎朝げんくわんへ出て、

『誰か居るか。』

と呼ぶと、いつも藤吉郎が眞先に出て來た。

或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、

『誰か居るか。』

と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て來た。

『そち一人か。』

『はい。』

『いつもより早いのに、よく參つて居つた。』

『いつも人より一時前に參つて居ります。』

『一時も前に。』

といつて信長は驚いた。一時は今の二時間にあたるのである。

『寒からうが。』

『少しも寒くはございません。』

『寒くはない。』

『はい。これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません。』

信長はかるくうなづいたが、其後間もなく藤吉郎を草履取から引上げて役人の數に入れた。これがそも〳〵藤吉郎出世のいとぐちである。

木下藤吉郎つて誰のことでせう。
（題目についての豫想をいはせ、題材に對する期待心を喚起する。）
木下藤吉郎のどんなことを書いたものでせう。
通讀させる。（低音讀）
（作者の想をつかませる。）
どうでした？……木下藤吉郎がどうしたといふのです？
（めい〳〵に讀んで得たことをいはせて見る。）
それは何時のこと？
豐臣秀吉といふのは？
するとこの文は？
（出世のいとぐち）
木下藤吉郎 ——→ 豐臣秀吉
（草履取） （關白）
何が出世のいとぐち？

出世……出世してどうなつた？
いとぐち……いとぐちになつたのは？
これが……何を指してゐる？
そも〳〵……何がそも〳〵？
藤吉郎を草履取から引上げたのは誰？
（兒）信長です。
（兒）織田信長です。
信長はどうして藤吉郎を引上げたのでせう。
（兒）いつも眞先に出て來たから、
（兒）寒くはございませんといつたから、
（兒）感心したから、
（兒）えらいと思つたから、
それを頭においてもう一度讀んでごらん。
——微音讀——

個　讀

（この際對話の部分を二人の子供に分けて讀ませて見る。）

作　者　或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て來た。

信　長　『誰か居るか。』

藤吉郎　『はい。』

『そち一人か。』

『いつもより早いのに、よく參つて居つた。』

『いつも人より一時前に參つて居ります。』

『一時も前に。』

『寒からうが。』

『少しも寒くはございません。』

『寒くはない。』

『はい。これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません。』

信長はかるくうなづいたが、其の後間もなく藤吉郎を草履取から引上げて役人の數に入れた。これがそもく藤吉郎出世のいとぐちである。

藤吉郎が出世のいとぐちは？

（兒）誰か居るかと呼ぶと、いつも藤吉郎が眞先に出て來た。

（兒）いつも人より一時前に參つて居りますといつたの、

（兒）少しも寒くはございませんといつたの、

（兒）これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございませんといつたの、かうして子供から出る問題を捉へて、それを確めながら（討議法により）漸次文意へ文意へと接近させる。

（この場合、問題の解決は主として討議法により、出來るだけ多くの兒童にめいめいの意見を發表させる。）

――討　議――

それを出世のいとぐちと見たのは？

（兒）この文を書いた人です。

（兒）作者です。

作者は藤吉郎のどこに感心したのでせう。

（兒）いつも眞先に出て來たこと、

（兒）少しも寒くはないといつたこと、

（兒）これが御奉公だといつたこと、

――討　議――

作者がこの文を書いたわけは？

（兒）えらいなァと思つたから、

（兒）感心だなァと思つたから、

（兒）これを人を知らせようと思つて、

一番力を入れて書いたところは？

（兒）大雪の朝のこと、

（兒）對話のところ、

對話の中で一番大切なところは？

（兒）いつも人より一時前に參つて居ります……

（兒）これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません……

（かうして文意の『これが御奉公だ』といつたこゝろをはつきりと掴ませる。）

では書いた人――作者――の氣持になつて、もう一度一緒に讀んで見ませう。

――低音讀――

――範讀、個讀――

その四　餅つき　（國讀卷八）

餅をつく音に目がさめた。はね起きて見ると、土間の大釜の上に積んであるせいろうからは、盛にゆげが上つてゐた。

おかあさんは取粉をのし板の上にひろげて、餅のつき上るのを待つていらつしやる。おとうさんはきね、おばあさんはこねどり。おぢいさんは大釜の火をたいていらつしやる。

にいさんが奥の間に、餅を並べる所をこしらへてゐた。

『お早う。』

といふと、

『よく目がさめたね。今四時を打つたばかりだ。』

と、にいさんがいつた。

つき上ると、おばあさんが餅を臼の中で丸めて、おかあさんの所へ持つていらつしやつた。おかあさんはそれを二つにちぎつて、ぐるぐるまはしていらつしやつたが、忽ちきれいなおそなへになつた。

二臼目で小さなおそなへが幾かさねか出來、三臼目からは、のし餅が出來た。四臼目の時は、おぢいさんも手つだつてつかれた。

二かさね目のせいろうから、ゆげが上るまでに、少し間があつた。其の時

にいさんが、

『私にもつかせてみて下さい。』

といひ出すと、おぢいさんが、

『とてもまだ。』

とおつしやつたが、おばあさんは、

『まあ、ついてみるがよい。』

とおつしやつた。

いよ〳〵にいさんがつき出した。始のうちは勢がよかつたが、間もなく腰がふらつき出して、ふみしめてゐる兩足が、きねをふり上げるたびに動いた。おとうさんが、

『せいは高くても、まだだめだ。』

とおつしやつたが、それでもとう〳〵一臼だけはつき上げた。

八時頃には、すつかりすんだ。おしまひの一臼には、小豆やきな粉をつけてうちでもたべ、近所へも配つた。

みんな讀んで見ましたか。

どんなことを讀みましたか。

餅のつき方でしたか？

餅のこしらへ方でしたか？
それがはつきりしなければいけません。
では餅つきのどんなことを讀みましたか。
それは誰が？
どこでそれが分りますか。
それではこの文を書いた人は？
（兒）こゝで話をしてゐる子供です。

――作　者――

それでよほど確かになりました。
ではそれを頭において――この作者のやうにそばで見てゐるつもりで――もう一度靜かに讀んでごらん。
（靜かに一回通讀させる。）

――微音讀――

この子供――作者――が力を入れて書いてゐるのはどんなことでせう。

（はつきりした答が出なかつたら、もう一度調べさせて見る。）
どうでした？
調べがつきましたか。
（めい〳〵調べたことをいはせて見る。場合によつては黒板に書かせて見るのも一法であらう。）
（兒）にいさんが餅をつくところ、
（兒）おそなへが出來上るところ、
（兒）はね起きて見たときのこと、
（兒）『お早う』といふと、『よく目がさめたね』とにいさんがいつたところ、
どうしてそこに力を入れて書いたのでせう。
（この答もまち〳〵であらう。）
するとこの文はどうして出來たか、書いたわけがいへませう。
（この場合、擧手して應答をもとめても、わざと答へさせないで記帳させる。）

――記　帳――

雷同をふせぐために、めい〳〵に記帳させる。しかし大體おもしろかつたから、

うれしかつたから、

といつた答に落付くであらう。このおもしろい、

うれしい、

は卽ちこの文の文意で、全文はこれで統率されてゐる。どれがいゝか調べて見なければ分りませんが、先づそれでこの文の出來たわけははつきりしました。

（驗證的取扱は次の分析の段においてする。）

では先生と一緒に讀んで見ませう。

（數）餅をつく音に目がさめた。

はね起きて見ると

（兒）土間の大釜の上に……

おかあさんは……

おとうさんは……

おぢいさんは……

それを見て——作者は——何と思つたでせう。

（數）にいさんが……

にいさんを見つけた弟は？

この子供（弟）——→書いた人（作者）

お餅の出來るところ

つき上げると……（誰が）

おばあさんが……（何を）

餅を……（どうした）

おかあさんが——→讀んでごらん。（兒）

こゝで大切な句は？
　忽ちきれいなおそなへになつた。
二臼目で……（おそなへ）
三臼目からは……（のし餅）
四臼目の時は……（おぢいさんも手つだつた）
　（括弧の中は兒童）
それを見てどう思つたでせう。

にいさんのもちつき

（教）二かさね目のせいろうから……
　その時にいさんが……
（兒）私にも……
　おぢいさんが……
　おばあさんは……

（教）いよ〳〵にいさんがつき出した。
　始めのうちは……
（兒）勢がよかつたが……
（教）間もなく……
（兒）腰がふらつき出して……
（教）おとさんが……
（兒）せいは高くても、まだだめだ。
こゝらを讀んでどう思ふ？

すんだのは

（教）おしまひの一臼には……
（兒）小豆やきな粉をつけて……
どうです。みんなが調べたのに間違はありませんか。
間違ないと思ふ人？

問違つてゐたと思ふ人？

間違つてゐたのに氣付いた人はお直しなさい。

それでいよ〳〵この文の出來たわけがはつきりしましたね。

――個　讀――

――自由讀――

今日はこれで……

その五　弟から兄へ　（國讀卷九）

にいさん、昨日でうちの田植がすつかりすみました。『今年ほど水の都合のよかつた事はない。』と、おとうさんが喜んでいらつしやいます。あの降りつゞいた雨のおかげで、山田の高い所まで一息に植ゑることが出來ました。

一昨日海軍のにいさんが、休暇でお歸りになつたので、おとなりからの手づだひと合せて、植手が八人になつて、にぎやかでした。私は苗くばりをして、『お前もたしかに半人前。』だとおかあさんにほめられました。田植がすんだので、昨夜は手つだひの人たちを呼んでごちそうをしました。其の時おとうさんがにいさんと、『世の中は何でも一生けんめいに働く者が勝だ。米が出來るのも、麥が取れるのも、土といふありがたいものが、めい〳〵の骨折に對して、御ほうびを下さるのだ。うち中が丈夫で仲よくかせぐ、こんな仕合なことはない。』と話していらししやいました。おとうさんは今朝も、『もう二番茶もつまなくてはならない。それがすむとやがて夏蠶の上りだ。にいさんたちの分もわたしが働くのだ。』とおつしやつて、大そう元氣です。うちの事はすべて御安心下さい。夏休も近くなりました。みんなでにいさんのお歸を待つてをります。

六月十日　　要吉

兄上様

『弟から兄へ』……（板書）

手紙ですね……誰が誰に當てゝ出した手紙ですか。

どんなことが書いてありませう。一度讀んでごらん。

（ゆつくりと一回通讀させる。）

――低音讀――

（場合によつては、視寫又は聽寫によるのも一法であらう。）

手紙を書いた人は？
相手のにいさんはどこへ何しに行つてゐる？
（兒）遠方の學校へ行つて勉强してゐる。
（兒）東京かどこかの學校へ行つてゐる。
それはどこで分る？
（兒）『夏休も近くなりました。みんなでにいさんのお歸を待つてをります。』
とあるから、
いつ出した手紙？
（兒）六月十日
用件は？
（兒）田植がすんだこと、
（兒）水の都合がよかつたこと、
（兒）田植がすんでみんなにごちそうをしたこと、
（兒）海軍のにいさんも休暇で歸つて來て、大層にぎやかだつたこと、

（兒）苗くばりしておかあさんからほめられたこと、
（兒）おとうさんが何でも一生けんめいに働く者が勝だとおつしやつたこと、
（兒）おとうさんがにいさんたちの分もわたしが働くのだとおつしやつたこと
と、
どれが一番大切な用件でせう。
（この場合一問一答の教式をさけ、討議法によつてめい〳〵の考へを自由に述べさせる。）

――――討　議――――

この手紙を讀んだにいさんの心持は？
（兒）うれしかつたらうと思ひます。
（兒）安心しただらうと思ひます。
（兒）もつたいないと思つた……
（兒）みんなに働かせてすまないと思つた……
（兒）ありがたくて〳〵泣いたであらうと思ひます。

にいさんの心持

うれしかつた。
安心した。
もつたいない。
すまない。

ではにいさんの心持になつて、もう一度讀んでごらん。

――――默　讀――――

ゝゝさん讀んでいたゞきませう。

ゝゝさんにも……

――――個　讀――――

要吉はどんな考へでこんな手紙を書いたのでせう。

(兒) 田植がすんだことを知らせようと思つて……

(兒) にいさんに安心させようと思つて……

(兒) にいさんが心配してゐるだらうと思つて……

要吉の心持 心配してゐるだらう / 安心させよう 手紙を書いたわけ、

では要吉の心持になつて讀んで見ませう。

――――低音讀――――

――――個　讀――――

その六　畫師の苦心　(國讀卷十一)

昔、泉州堺のなにがし寺に、或畫師久しく寄食してありけるが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を經たり。住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、

『君は畫を以て一家を成せる人なるに、數年の間一度も筆を取り給ひし事なし。我もとより衣食の費をいとふにあらざれど、何時までもかくておはすべきにあられば、今より何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。愚僧も所用ありて京へ上り、或は一二年滯在せんもはかり難し。』

といへば、畫師

『そはいと名殘をしき事なり。さらば謝恩の爲に何か畫がきて參らすべし。』

とて、心構せし樣なりしが、筒筆を取らで數日を過しぬ。

或夜小僧、住持の居間に來りて、

『彼處に行きて、彼の畫師のする樣を見給へ。』

とさゝやきければ、住持ひそかに行きて見るに、畫師は障子に身を寄せて、樣々に姿を變へつゝ寢起する樣なり。さまたげせんも心なしと思ひて、住持は其のまゝ寢間に入れり。

翌朝畫師は常にもあらず早く起出で、ふすまに向ひてしきりに筆を動かしゐたり。其の畫がく所皆鶴にして、筆勢非凡、丹青の妙言ふべからず。かくて次の夜は如何にとうかゞふに、畫師は前の如く夜もすがら寢ねずして、明日はかく畫かんなど獨言してゐたりければ、住持は尙知らぬ顏して過ししに、十日餘りにして、ふすまの鶴は二十四五羽となりぬ。其の後又夜更けてうかゞひ見れば、今度はひぢを張り、足をのべ、手を口に當てゝ、鶴の臥したる樣をなせり。夜明けて住持、畫師に向ひて、

『今日かき給はん鶴の姿はかやうなるべし。』

と、夜中に畫師のしたる樣をまねて見るに、畫師驚きて、

『我が心に思ひ構へし事を如何にして知り給へるか。』

と問ふ。住持

『昨夜のぞき見て知りたり。』

此の一言を聞くや、畫師又かのふすまの鶴に筆を取らず、唯杉戸に檜一本

を畫がきて東國へ出立しぬ。

未だ一月もたゝざるに、かの畫師は突然歸り來れり。住持驚きて、

『東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ』

と問へば、畫師

『先に畫がきたる檜、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、東國へ下る路すがら、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たればかき添へんため歸りしなり。』

とて一枝かき添へ、又別れを告げて立去れりといふ。

題目——畫師の苦心——についての考察、

畫師とは？

畫師の苦心とは？

するとこの文の狙ひどころは大體分りますね。

ではどこにどんな苦心があるのでせう。調べてごらん。

（讀んで調べたところを記帳させておく）

調べがつきましたか。

大體の筋はどうでした？

泉州堺なにがし寺〔畫師 住持……小僧〕　昔

苦心のあらはれてゐるところは？

――記　帳――

『畫師は障子に身を寄せて、樣々に姿を變へつゝ寢起する樣なり。』

『翌朝畫師は常にもあらず早く起き出で、ふすまに向ひて、しきりに筆を動かしゐたり。其の畫がく所皆鶴にして筆勢非凡、丹青の妙言ふべからず。』

『畫師は前の如く夜もすがら寢ねずして、明日はかく畫がかんなど獨言してゐたりければ、住持は尙知らぬ顏して過ししに、十日餘りにして、ふすまの鶴は二十四五羽となりぬ。』

『夜更けてうかゞひ見れば、今度はひぢを張り、足をのべ、手を口に當てゝ鶴の臥したる樣をなせり。』

『先に畫がきたる檜、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、東國へ下る路

すがら、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たればかき添へんためにかへりしなり。』

（かうして作者が意圖せる苦心の意味形態を讀取らせる。）

ではそこらに注意して、もう一度ゆつくり讀んでごらん。

――微音讀――

ゝゝさんに讀んでいたゞきませう。

ゝゝさんにも……

――個　讀――

作者が一番力を入れて書いてゐるのはどこでせう。

――討　議――

畫師の人柄のあらはれてゐるところは？

――記　帳――

『何一つの畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を經たり。』

『そはいと名殘をしき事なり。さらば謝恩の爲に何か畫かきて參らすべし。』

『尙筆を取らで、數日を過しぬ。』
『此の一言を聞くや畫師又かのふすまの鶴に筆を取らず。』
『未だ一月もたゝざるに、かの畫師は突然歸り來れり。』
住持の人柄のあらはれてゐるところは？

記　帳

『君は畫を以て一家を成せる人なるに、數年の間一度も筆を取り給ひし事なし。我もとより衣食の費をいとふにあらざれど、何時までもかくておはすべきにあらねば、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。愚僧も所用ありて京に上り、或は一二年滯在せんもはかり難し。』
『住持ひそかに行きて見るに、』
『さまたげせんも心なしと思ひて、住持は其のまゝ寢間に入れり。』
『次の夜は如何にとうかゞふに、』
『住持は尙知らぬ顏して過ししに、』
『夜明けて住持、畫師に向ひて、「今日かき給はん鶴の姿はかやうなるべし。」と

夜中に畫師のしたる樣をまねて見するに、』
『東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。』
（かくして畫師と住持の人柄を想像させ、その間に
醸し出された藝術的零圍氣に讀みひたらせる。）

註

『筆勢非凡にして、丹靑の妙言ふべからず。』はこの文の眼目で、かく〳〵かやうであるからして、その畫がくところは（素描）筆勢非凡であり、その色取るところは（布彩）丹靑の妙を極めたといふのである。だから『筆勢非凡』『丹靑の妙』はこの文の字眼となつてゐる。

その七　蜜柑山　（國讀卷十二）

沖を走るは丸屋の船か、
丸にやの字の帆が見える。
調子のよい蜜柑採歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはして、何處からともなくのどかに聞えて來る。今登つて來た方を振返つて見ると、幾段に

も幾段にもきづき上げられた山畑には、蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。どれを見ても、枝といふ枝にはもう黄金色に色づいた實が鈴なりになつてゐる。黒い程こい綠の葉の間から、其の一つ〳〵が日の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。

又少し登る。どの山を見てもどの谷を見ても、蜜柑の木でない處はない。ふと見ると、ついそばの木の下では、かごを首に掛けた二三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。さつきの歌の主であらう。あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよきん〳〵と聞える。

ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。あれは港の親船へ蜜柑を運んで行くのであらう。小春日和の暖さにとけて、其處からも夢のやうに船歌が聞えて來る。

讀んで見ましたか。

讀んで頭にぱつと來たのは何でせう。

（兒）蜜柑山

（兒）蜜柑山の美しさ、

（兒）ちよきん〳〵といふ鋏の音、

（兒）蜜柑採の歌

この文を書いた人（作者）は？

（兒）蜜柑山に登つた人、

（兒）蜜柑山に登つて美しいなアと思つた人、

同じ場所から見て書いたのですか。

（作者の位置を問題にして討議させる。）

――――討　議――――

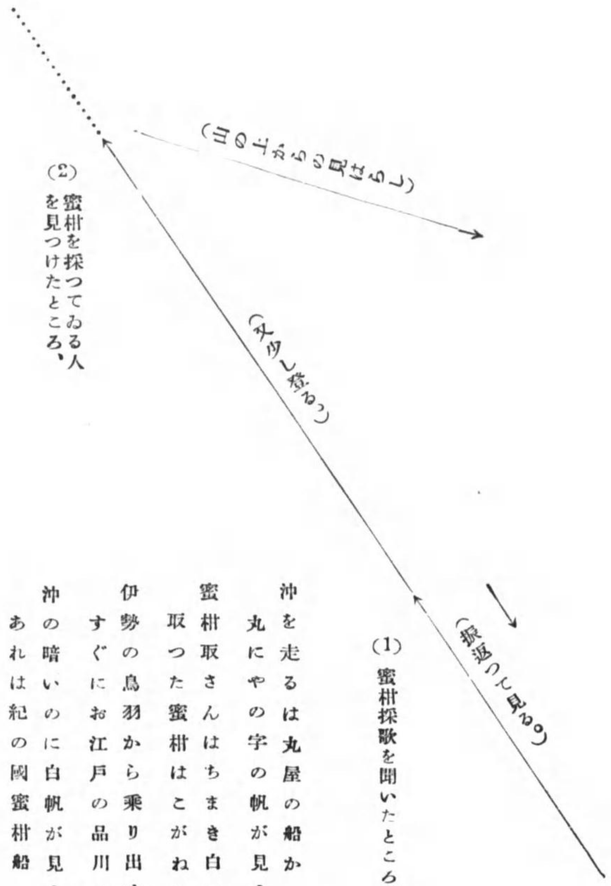
（1）蜜柑採歌を聞いたところ、

振返つて見る。――山畑――蜜柑の木

（2）蜜柑を採つてゐる人を見つけたところ、

ふと見ると――蜜柑を採つてゐる人――さえたはさみの音

（3）山の上からの見はらし――ふもとの川――白帆――船歌



沖を走るは丸屋の船か
丸にやの字の帆が見える
蜜柑取さんはちまき白い
取つた蜜柑はこがねいろ
伊勢の鳥羽から乗り出す船は
すぐにお江戸の品川へ
沖の暗いのに白帆が見える
あれは紀の國蜜柑船

(1) これまで登る間は、登ることにのみ氣を取られてゐたと見える。こゝでふと調子のよい蜜柑採歌が耳にはいつたので立ち止つたのである。

(2) 思ひ出して又少し登る。そこはもう峠にも近く附近の山や谷が一目に見える。

だん〳〵畑
振返つて見ると、
行儀よく並んだ蜜柑の木
鈴なりになつた黄金色の實
まるで繪のやうだ。

少し登る……
山の上からのながめ——
山も谷も蜜柑の木ばかり、
ふと見ると——
蜜柑を採つてゐる人、
さつきの歌の主であらう。
さえたはさみの音、
ちよきん〳〵、
まるで夢のやうだ。

耳を働かせたところは？

――記　帳――

『沖を走るは丸屋の船か、
　丸にやの字の帆が見える。
調子のよい蜜柑採歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはして何處からともなくのどかに聞えて來る。』
『あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよきんちよきんと聞える。
小春日和の暖さにとけて、其處からも夢のやうに船歌が聞えて來る。』

目を働かせたところは？

――記　帳――

『幾段にも幾段にもきづき上げられた山畑には、蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。どれを見ても、枝といふ枝にはもう黄金色に色づいた實が鈴なりになつてゐる。黑い程こい綠の葉の間から、其の一つ〳〵が日の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。』

『どの山を見てもどの谷を見ても、蜜柑の木でない處はない。ふと見ると、ついそばの木の下では、かごを首に掛けた二三人の男が器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。』
『ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。』

（かくして作者が繪畫的印象に音樂的諧調を添へることによつて、蜜柑山氣分――南國情調――を描出さうとした作意のほどを想察させる。）

では一度讀んで見ませう。

――範　讀――

みんなもう一度讀んでごらん。

――低音讀――

〻〻さんに讀んでいたゞきませう。
〻〻さんにも……

――個讀數名――

讀んで感じたことは？

（兒）蜜柑山が目の前にちら〳〵する。

（兒）美しいなァと思つた。

（兒）一度行つて見たいなァと思つた。

（兒）行つて見たらどんなに美しいだらうと思つた。

等、等、等、

よく書を見る人は、一句を見ても、其の理を得て用ふれば、用をなして益あり、よく書をよまざる人は、千萬卷のふみをよんでも、其のよきことを取扱ふることをしらず、益なし。たとへば、石をわりて玉をとる人あり、是よく玉をしればなり、寶の山に入りても手を空しくして歸る人あり、是、玉をしらざればなり、書を見る人、益なきとも、亦、かくの如し。（益軒集）

第二　文意の自證

一

分析といふこと　直觀の主觀的であるのに較べて、分析は客觀的であり考察的である。彼は心に映じ心眼にうつるがまゝを直下に內視し內聽しようとするが、これはなるべく主觀を遠ざけ冷靜な態度で文に接しようとする。けだし第一次直觀によつて得たるものは素朴的な體驗流であつて、まだ客觀的價値によつて明證性を獲得したものではない。それは充實化と發展性を內含しながらも、未だ實にせられない不安の狀態である。したがつて我々は、單なる直觀卽ち意味的作用に止ることなく、充實化作用——充實化とは對象の本質を把捉することである。——によつて何等かの意味を對象に附與しなければならない。この境地は反省的ともいへれば分析的ともいへる。これを過程的にいへば、直觀から分析、分析から直觀への辯證的發展である。

現象學的分析　『眞正なる批評は第一の印象を退いて解剖したものに過ぎない。』と漱石夏目先生はいつた。然り分析は一歩退いて見なほすことである。思ひなほし聞きなほすことである。直觀が閃光的な印象であるのに比して、これは作者の心に歸依しておもむろに文に聽かうとするのである。それは部分的な分解的な反省であり考察ではあるが、概念や法則に導く自然科學的のそれではない。全一なるものを背景としての部分であり、綜合作用を前提としての分解であつて、部分の中に全體を宿し、一語の中に全文を孕む現象學的分析――體驗的分析といつてもいゝ――でなければならない。

文はその構成要素である語・句・節の有機的結合によつて、全一的な生命體を具現する。それは我々の生ける身體が頭・胴・手足の各部、目・耳・鼻・口の各機關によつて、一個の生命體を形づくつてゐるのと同じである。身體の各部が個々別々のものでないやうに、文の語・句・節も亦有機的全一においてのみ意義がある。全を孕む個・多を內含する一、そこには生命の交流があり魂の息吹がある。我々は文を通してこ

の生命體の實相を直視しようといふのである。

客觀的存在である文に對して、讀者のとる態度には明かに二つの大きな潮流がある。一語一句の研究に專念して文の核心に觸れることを閑却するものが一つ、一讀直ちに文意に殺到し、作者の體驗を自己の內面に移植しようと試みるものがその一つ、前者は關心を文の表面に强調し、言語的知識の豐富をこれ念とするに對して、後者は關心を文の奥底に內在せる作者の生命層に置き、他我を讀むことによつて自己の向上發展をこれ念とする。しかして讀みの眞諦が前者にあらずして後者にあることはいはずもがなである。

讀みの學習過程も亦、これに基調すべきはいふまでもないことで、第一次直觀において得たる文意は、それがよし素朴的な全體觀であるとしても、讀者と作者との想の交流はこゝに開始されたものといへよう。かくて次に來るものは、この素朴な全體觀――第一印象ともいへる――に對する反省考察の作用であつて、文の形の上に意識流を見んとする語意・句意・節意の究明があり、理解をより確實にする文字・語句の吟味檢討がある。かくして文そのものゝ意味を自己の生命の堪堪の中

に熔し込むことによつて、漸次作者の生命層は鮮明にせられ、魂の純動を的確に把握せしめることが出來る。いふところの分析――內省、自證――の段階はこれを意味する。

ノエマとノエシス　いふところの分析は、ヴントなどがいふ科學的分析のそれではない。――ヴントはこれを科學的研究法の三對六法の第一に數へてゐるが――直觀、分析、直觀とならべていふ場合の分析は、現象學的のそれを意味するはいふまでもない。

現象學における分析は直觀の領域において語り得るもので――本質學の一任務は本質的分析にある。又これを反省的分析ともいふ――すべて直觀によつて把握せられたるものは分析によつて始めて記述し得るものとする。

分析は主として意識の作用側面と客體側面との分析に始まる。フッセルはこれにノエシス、ノエマの語を用ひてゐる。ノエシスは意識の主觀的方面、卽ち作用側面――ノエシス的契機――を意味し、ノエマはその客觀方面、卽ち志向的に意識

される客體側面――ノエマ的內實――を意味してゐる。前のは働きかけるもの、卽ち思考するもの、後のは働きかけられるもの、卽ち思考されたものである。

ノエマは具體的體驗の中にあつて、核としての意味及び核の周圍に種々なる性格の層をもつ、ノエシスはノエマと具體的に結付くことによつて、それ自身には何等意味なき素材的要素に對し、意味卽ちノエマの核を附與し、意識をして對象を構成せしめる働をなすもので、素材的要素と共に純粹意識の實的要素をなすものである。

ノエマは具體的體驗において常にノエシスの性格に對應する性格をもつ。例へば、知覺、記憶、想像、又は判斷にては確言、臆測等のノエシス的性格に對應して、ノエマも亦それ〴〵知覺せられたるもの、記憶せられたるもの、想像せられたるもの、確言的に判斷せられたるもの、臆測的に判斷せられたるものなどの特性をもつ。しかしこれらのノエマに在つて特性をもつ中核的部分は常に同一である。例へば知覺せられたる『花咲ける樹』も想像せられたる『花咲ける樹』もそれ〴〵の具體的ノエマに在つて性格をもつ中核的部分『花咲ける樹』は同一である。また確言

及び臆測といふ性格をもつ判斷ノエマにおいては、兩者の中核『SはPなり』は同一である。この中核的部分をフッセルはノエマの核――又は意味乃至內容――と呼んでゐる。エノマ的核とは種々なるノエマ的意味の、それを中心として群屬するところの或ものである。いはゞノエマ的核は種々なる意味をになふところの同一者であり、樣々なる賓辭の附け加はるべき主體である。事物を意識することは、それについて何等かのノエマ的意味を賓辭づけることであり、事物はこれらの賓辭を通して我々にとつて意識の對象となることが出來る。

現象學的體驗は單なる感覺の束でもなければ、また單に物質的に與へられたものでもあり得ない。それは一般に沈默せる暗き事實でなくして、生命ある意識作用であり、魂ある心的過程でなければならない。意識が何物かを目指すといふのも、それが何ものかを意味するからしてゞあり、志向的體驗は有意味作用となることによつて最も具體的なる精神現象となることが出來るのである。意味はこの點からして精神現象の中心的生命を形成するともいふことが出來よう。何等の意味をもたない精神現象は實は精神現象ではなくして物質現象であるに過ぎな

い。意識を意味的形相から引き離して單純なる心的過程と考へようとするのは却つて精神現象の何たるかを辨へない謬論であるとしかいへない。（山內博士による）と分析の精神とするところも亦こゝにある。

總じて精神現象はそれが意識事實である限り、そこには意識するものと意識せられるものとが存在することはいふまでもない。心理學者はこの二つの存在をどこまでも意識事實と見て、その間の關係を考へ自然科學的法則を發見しようとする。卽ち彼等はそこに二つの存在を見出しても決して自然的態度を捨てないで、むしろこの態度からしてのみこれらを觀察し研究しようとするのである。現象學徒はこの點において全く新しき立場に立つてこれらを見直さうとする。現象學にとつてそこに意識する作用と意識せられる客體との存在することは無論であらう。これらが事實としてそこに儼存することも決して拒否しようとはしない。しかし現象學的立場の特色はこれらをそのまゝにしながら、ひるがへつて全く新しき態度から見直さうとする點にあるのである。そこには作用も對象も最早單なる作用としてまたは對象として存在しないであらう。作用はたゞ何物

かを指示するものとして、對象は何等かの作用によつて志向せられたるものとしてのみ我々にとつて意味をもつ。作用と對象との二つの事實がではなく、この二つの本質的關係が現象學にとつて問題のすべてゞある。それ故に現象學の第一歩は、あらゆる意味において自然的態度を排除することに始まる。現象はこの排除又は括弧附けによつて、先づ自然的存在であることから離れ、次に超越的事物であることから脱するのである。超越的空間に存在すると考へられる自然物は、現象學的排除によつて第一に精神的なる現象となり、第二にそれ故に直接なる意識に内在的となることが出來る。例へば今庭前に咲き誇る櫻花を愉快に眺めつゝあるとせよ。この花の知覺と、それに伴ふ好感とはいふまでもなく知覺せられたるもの、好感をもつて眺めらるゝ櫻花とは決して同じものではない。自然的態度においてこれを言ひ表すとき、櫻花は第一に知覺の對象として存在し、第二に超越的空間において存在する。知覺と感情とはこれを眺むる人の心的過程としてその人に屬する。さうしてこの二つの存在の間には實存的な關係が成立すると考へられる。

フッセルはなほこの事實を林檎の樹の知覺に例をとつて明確な說明を與へてゐる。我々は快を味はひながらこの庭の綠の芝の上に花を咲かしてゐる林檎の樹を見てをると假定しよう。知覺及びそれに同伴して居る快は、言ふまでもなく知覺せられたるもの及び快なるものではない。自然的態度にあつては、林檎の樹は超越的なる實在中の一存在であり、知覺ならびに快は實在的個人に屬する心的狀態である。しかしてこの實在的個人乃至實在的知覺と、實在する林檎の樹との間には實在的なる關係が成立して居る。然るに現象學的態度においては、超越的世界は括弧に入れられ、現實的なるものは還元を受け、我々は知覺及び快なるノエシス的體驗複合の中に本質的に見出されるものにのみ志向する。卽ち物理的世界全體と同時に知覺及び知覺せられたるものゝ間の實在的關係は排除せられる。それにもかゝはらず、知覺と知覺せられたるものとの間の關係は實在的關係としてゞなく、純粹内在における本質關係として依然として殘存する。現象學にあつては實在的なる林檎はその探究對象とはならない。たゞこの樹の知覺——一般に意識のみが對象となる。しかもいはゞ一切のものは舊態を存するのであ

る。卽ち現象學的に還元せられたる知覺體驗もやはり『この庭の綠の芝の上に花咲ける林檎の樹』の知覺である。林檎の樹はその要素や性質や性格を少しも失はない。知覺の對象は依然としてそこの庭に在る超越的對象である。たゞかかる超越的對象なる樹そのものは括弧に挿入せられて、この樹の知覺ならびにそのうちに意識せられた客觀、卽ち內容のみが問題とせらるゝのである。樹そのものは排除せられるが、しかもそれは知覺せられることによつて意識の構成する內容なる意味の中に攝取せられ、それによつて代表せられるのである。

かくの如き知覺ノエマ、卽ち知覺せられたものそのものとは如何なるものであるか、それは如何なる本質的要素を自らのうちに藏して居るか、かゝる本質的問題を解くために、我々は本質的所與に歸依し、知覺をそのノエマ的なる側面に關して記述しなければならない。

知覺のうちにはその本質に不可分離的に知覺せられたものそのものなる知覺ノエマが屬する。知覺ノエマは『實質的事物』『植物』『樹木』『花咲ける』等として言表せられる。この場合の引用記號は事物的存在そのものを表すのではなく、

それらのものゝ記號的變形、したがつて根本的なる意味變形をあらはす。ノエマは樹そのものゝ代表者である。ノエマのうちには『自然的存在として現實的に現象する樹』のもつて居る性質は悉く把捉せられて居る。けれども兩者は決して同一物ではない。一般に代表者は代表せられる當のものではない。ノエマは樹の代表者であるが、樹そのものではなく、また樹の知覺自體ではない。對象は意識せられることによつて、そのまゝ意識に內在的となるのではなく、その記號の價値轉換的變形を受けて內在的となるのである。樹そのものは自然における存在物であるが、樹についてのノエマ、卽ち知覺作用に密接不離に內在する知覺意味としての知覺せられた樹そのものは存在物ではない。樹そのものは火に燃燒し化學的要素に分解せられる。けれども知覺せられた樹、卽ちノエマは知覺の意味であるが故に燃燒せず、又化學的要素に分解せられもせず、何等の力や事實的特質をも有しない。ノエマは對象ではなく、また對象自體を成立せしめて居る實質的本質でもない。ノエマは對象としての樹について言表せられる意味である。されど樹そのものがその實質的本質として有する特質そのものではなく、樹の實

質的本質を表す意味である。樹の實質的本質は樹なる自然的存在の有する性質的統一であるが、ノエマは意識自らの有する形式と素材との志向的統一である。個々の樹の實質的本質は樹が燃燒すると同時に失はれるであらう。しかしノエマは樹そのものではなく意味であるが故に燃燒しない。ノエマは存在ではなく非存在または僞存在である。意識內に成立する對象が事實的存在である時にも、それに關するノエマは事實的存在ではなく、非實有的なる論理的意味形象である。

ノエマは意味であるが、常に同一的なるものではなく、全的ノエマは種々なるノエマ的要素から成立し、ノエシスの種類ならびにその相違に應じてそれ〴〵異なる性格や異なる陰影を得る。判斷のノエマ、表象のノエマ、空想のノエマなどはそれ〴〵その本質狀態においては相等しいが、その性格を異にする。更に判斷のもろ〳〵のノエマ、表象のもろ〳〵のノエマもまたそれ〴〵その作用側面に應じて異なる。ノエマの相異なる性格はそれ〴〵のノエマにおいて不可分離的に見出され、しかも必然的にそれに屬するものとしてノエシス的體驗の當該種類に相關的に關係する。自我の視線はノエシス層の異なるにしたがつて、それ〴〵異なる

志向的變形卽ち注意的變化を受ける。この注意不注意の程度によつて意識は明暗の度を異にし現實性の樣相を異にする。かゝるノエシス層の種々なる性格化はノエマ層に影響してその性格化を異ならしめる。全的ノエマはノエシス的要素の相違に應じて異なる性格を有するに至る。ノエシス的變化とノエマ的變化との間には密接なる平行的關係が成立する。ノエシスの微細なる變化もノエマに映じてノエマは多少異なる意味となる。したがつてノエマの最低の差異もノエシスの最低の差異を指示する。一般に關係項の變化はそのまゝ關係に平行的に影響を與へる。しかしかゝるノエシスならびにノエマ的變形にも拘はらず、種々なる意識は同一の對象の意識であり得、種々なるノエマは同一の對象性であり得る。したがつて我々は全的ノエマの內に本質的に異なる層を分離しなければならない。卽ち一の全的ノエマの中に變化的層と不變的中心的核心とを區別しなければならない。しかして變化的層は一つの中心的核心の周圍に集まる。この核心が卽ち純粹對象的意味である。（山內得立博士、佐藤慶二氏による）

讀みの本質は文意——文章自體——の直觀にあるが、それはひつきやう純粹意

識をノエマ、ノエシスの關係において把捉するの意味に外ならない。――いふところの文章自體はノエマの核心を意味したもので、それは作用側面であるノエシスによつて生れたものである。文はこのノエマが具體性をおびて客觀的存在となり、思惟にまで發展したものである――文意を中心にして、語意・句意・節意の分析に入る根據もまたこゝに存してゐる。

分析のこゝろ　分析の職とするところは第一次直觀において得たるものゝ反省であり考察である。したがつてすべての仕事が第一次直觀の結果を出發點としなければならないのはいふまでもない。前にもいつたやうに最初の直觀はいはば閃光的な第一印象で、まだ志向作用の眞相を具體的に實現したものではない。だからその結果をたしかめ文意確認の境地に達するまでには、その個々を分析することによつて明證性を獲得すると共に、更に擴大し更に深化して行く必要がある。いはゆる充實化作用とはこれを意味してゐる。この意味においてセンテンスメソットにおける分析の位置は頗る重要で、學習過程そのものゝ生殺は一にそ

の取扱の如何にあるともいへる。

世にはこの過程を第一次直觀と第二次直觀の接合劑のやうに考へ、繁瑣な分解に子供を退屈がらせ、甚だしきに至つては文を離れて徒らなる部分的討議の喧噪に陷つてゐるのさへ見受ける。かくしてこの學習過程をも不自然な觀念的遊戯として一蹴し去らうとする人すらある。

いふところの分析はそんな間に合せのものではない。分析も直觀の一形式であつて、分析なきところに直觀の明證は成立たない。對象が餘すところなく、それ自らの姿をあらはしつくしたとき、人は意味充實の極限に達し得たといふ。意味指示も直觀において充たされんことを志すが、直觀作用はあらゆる側面において內容の完き要素の上に充實せられることを究極とする。そこに直觀的なる內容はあらゆる可能的なる充實の集積となり、言ひ表すものと言ひ表されたるものとが完全に一致するのである。フッセルによれば、或るものが認識せられたといふことは、それについて志向せられたものが與へられたものと一致したことであり、意味指示が直觀において充實せられたことの謂に外ならない。明證とは志向せ

られたるものと與へられたる直觀との一致にあつて、それは常に對象の表象性において十全的であることを必要條件とすると、分析のこゝろとするところも亦ここにあるといへよう。

我々は第一次直觀によつて得たる結果を反省し考察することによつて明證性を求めようとする。さうして語意・句意・節意と分析的な仕事を繰返すのであるが、その何れもが文意確認の先行的行爲であつて、やがて第二次直觀に入るの準備作用に過ぎないことを記憶しなければならない。

文における語・句・節は、語意・句意・節意と原理的に異なつてゐる。前のは外的形骸的で、後のは內的不可視的である。我々は外的な語・句・節の事實を取扱ふのではなく、語意・句意・節意の本質的な意味の世界を取扱はうといふのである。事實の世界からしてはたゞ事實をしか得ることは出來ない。本質の直觀はそれとは全く別な立場において可能である。それは花において赤を見るが如く、物において形を見るが如く――！

我々は個物を外にして本質を見ることが出來ないやうに、語・句・節をはなれて、語

意・句意・節意を見ることは出來ない。しかし個物において本質を見るのは個物を個物として見るのではなく、個物の中に本質を見出すところの心の眼でなければならない。語において語意を見、句において句意を見、節において節意を見るのも亦これに外ならない。

內省と自證　分析の第一歩において我々は先づ自然的態度を排除しなければならない。自然的態度とは常識の態度、素朴的實在論の態度、卽ち個的主觀の立場である。卽ちそは事實としての對象を超主觀的に我々の前にあると見る普遍定立の立場である。しかしてこの態度の基礎となる作用は感覺的直觀である。常識をはじめとして、もろ〳〵の特殊科學は皆この立場に立つもので、そこには精神物理的自我に對して非我が存在し、一般に自然界をはじめ、愛憎・意欲・嫌惡等の心的現象は勿論、各種の文化構造・工藝美術品等もろ〳〵の形態を有するもの、更に美的價値及び道德・法律・宗教等の實際的價値が存する。然るにそれらすべては形相的――本質的――還元によつて皆括弧に挿入される。したがつてそれらを對象と

する自然科學や精神科學等の經驗科學も排除せられる。卽ち事實とそれに關する事實科學とは、形相的還元によつて悉く括弧の中に挿入されてしまふ。かくして自然的態度は特殊なる變形を被むるのである。

かくの如く形相的——本質的——還元は一切の事實や存在に對して瞑目し、それらを括弧に挿入するといふ消極的側面を有するのみならず、更にまた積極的側面をも有する。しかしてこの積極的側面こそ判斷中止の學的價値ある部分である。卽ち形相的還元——本質的還元——は我々をして事實の偶然的・特殊的・超越的側面から眼を轉じて、積極的にその內在的・必然的本質へと志向せしめる。この還元によつて我々は事實の世界を去つて、その內面的本質の世界へと進入する。時間空間の規定によつて個別化された個々の事實に關する自然的態度から、いはゆる普遍化によつて普遍的・必然的・非實在的本質を觀る立場、卽ち本質的——形相的——態度へと移り行く。我々はかゝる態度をとることによつて、はじめて明確なる現象學的領域に直面することが出來る。（佐藤慶二氏による）かくして我々は分析の第一歩において、文字・語句・語意・句意・節意などの考察や吟味を行ふのである

が、要するにそれはすべての存在を意識の中に還元するための準備行爲に外ならない。

（1）文字・語句の理解
（2）語意・句意・節意の吟味
（3）不明事實の究明
（4）文理・文段の研究
（5）構想乃至表現の研究
（6）思想關係の吟味
（7）語法的・文法的取扱
等、等、等、

自然的態度の排除についで行はれるものは超越的態度の排除である。いふところの內省自證はこれを意味する。げだし自然的態度を排除して得たるものは超越的な對象であつて、未だ十分に內在化したものとはいへない。したがつて全

き意味において充實化作用の目的を達するためには、更に超越的な態度を排除することによつて二重の還元――先驗的還元と形相的還元との――を經なければならない。

フッセルによれば、事物的存在は必然的なるものではなく、全く偶然的なるものであり、疑へば疑ひ得るものである。すべての具體的に與へられたる事物もまた存在し得ないこともある。これに反して意識は必然的で直截的に全く疑ひ無いものである。空間的・時間的存在は單に志向的存在であり、單に意識に對して二次的・相關的存在であるに過ぎない。故に我々は世界否定――排除――によつて本來何物をも失はない。却つてすべての絶對的存在を獲得する。しかしてすべての超越者や精神的・物理的世界はその内に藏せられ、その内に構成せられる。意識は内在的なる絶對的存在であり、したがつてその存在のためには事物の存在は前提とせず、却つて存在一般の原範疇であり原領域である。超越的事物の世界をはじめ、すべての他の存在領域は本質的・必然的にこの原領域に根をおき、それに關係しそれに依存する。純粋意識は眞の存在であり、我々に取つて最初のものである。

と同時に我々の求める最後のものでもあると、

(1) 内省

あらはされた意味が我が意識の全系列中に占める位置について内省し認識することによつて明證性は獲得される。かく超越的立場をはなれ、靜かに自己を凝視することによつて自己の創造的發展が可能となる。

フッセルはいふ、直觀は對象を現前し顯現せしめるが、それによつて對象は必ずしも眞に存在するものとして現在化せられるとは限らない。直觀の充塡が最も完全なる場合においてのみ對象はそれ自身の姿において充全的に直觀せられる。寫影充塡の完全性の理想的限界が、直觀の場合において絶對的自體を顯現する。この完全に充塡した直觀によつて、全的意味志向が、媒介的・間接的・部分的ではなく、結局妥當的に、全的に、直接的に充實された場合が明證の目標である。かゝる場合がその充全性といはれる。しかしてこの完結的表象の直觀的實質はあらゆる可能的充塡の絶對的總和である。意味志向が充全的に充實された場合には、意識内

容は對象を具體的に顯現し指示する。そのとき代表する內容と代表される對象とは同一物となり、對象的者は在るがまゝに志向せられ、現實的に現在するものとして與へられると、

內省は反省の世界である。したがつてその態度は究明的であり、考察的であるのはいふまでもない。

（イ）內容の深究
（ロ）事實の吟味
（ハ）表現の巧拙
（ニ）表現の適否
（ホ）語法的・文方的考察
等、等、等、

（2）自　證

內省に次ぐものは自證である。自證とは主觀的なるものが客觀的なるものに

保證と承認を求めようとするのである。蓋し內省によつて主觀化されたものを客觀的なる表現に證示することによつて、ともすれば陷り易き獨斷の弊を防止して、自他包全・主客融合の天地を開拓しようといふのである。

自證は內省と表裏をなすもので、兩者は共に明證意識によつて基礎づけられてゐる。フッセルによれば、充全性は二重の意味を持つてゐる。卽ち一方には志向と直觀との適合の完全性、別言すれば充實の客觀的完全性を意味し、他方には表象的直觀自身における完全性、卽ち直觀自身の充塡の完全性を意味する。明證作用にはこの二種の充全性が必要にして且不可缺の條件であると、

內省が批評的であるのに對して、これは觀照的であるともいへる。彼は意味が意識の全系列中に占むる位置について反省した結果として生れ、これは意識の中にとらへられた狀態を純性質的に觀る態度である。

（イ）表現內容の考察玩味
（ロ）眞情の味到

（八）表現の妙味

（二）措辭・辭樣・韻律、その他修辭的研究

等、等、等、

かくして文そのものゝ意味を自己の生命の坩堝の中に熔かし込むことによつて、漸次作者の生命層は鮮明にせられ、魂の純動を的確に把握せしめることが出來る。

二

節意の意義　文は同時的・繼續的の存在である。したがつて同時的であると同時に繼續的であり、繼續的であると同時に同時的でもある。いふところの節意はこの繼續的な側面を意味したもので、それは同時的である文意に統率されると同時に、それを支持して有機的全一體を構成してゐるところに意義がある。むろん表現作用の繼續的過程の上からいつたら、節意の外に、句意・語意・文字などの諸要素

を見逃すわけには行くまいが、それとて有機的全一體の構成要素として、互に相より相たすけて同時的なる文意を支持してゐるのにかはりはない。

節意に似て非なるものに段意――段落の大意――がある。節意は文意の具象化したもので生命的な體驗流であるが、段意は外形的な表現面の意味を要約したものに過ぎない。それは恰も文意が大意と似て非なるものであると同一である。

例へば、

私ども の 町（國讀卷四）

私　ども　の　町　でも、この　あびだ　から　電とう　が　つく
やう　に　なりました。町やくば　も、けいさつしよ　も、いうびん
きよく　も　みんな　のきらんぷ　が　電とう　に　かはりました。
米屋　ごふく屋　小ま物屋　あら物屋　くすり屋　さか屋　さかな屋、
その　ほか　大きな　店　は　いくつ　も　電とう　を　つけました。
本町通　は　夜　も　ひる　の　やう　で、りはつ店　など　は　ま
ぶしい　ほど　です。
私　の　うち　でも　二つ　つけました。電とう　は　らんぷ　と

ちがつて、へやのすみずみまであかるく、その上火のようじんもようございます。

よこ町に電氣の力で、米をつく家も出來ました。電話も近い中に私どもの町へかかるさうです。又町はづれに大きな工場のふしんがはじまつて居ます。もう高いえんとつは大方出來上りました。これは大じかけでれんぐわをやく工場です。これが出來上るころには、てつだうが私どもの町を通つて、工場の近くにていしや場が出來るさうです。さうなつたら町はどんなにべんりになるでせう。

について文意はいふまでもなく『私』と明言してゐる作者が町の發展をよろこぶこゝろにあつて、電燈はそれを象徴したものと見るべきであらう。かくして

第一節……二十七頁一行目まで

第二節……二十八頁四行目まで

第三節……終まで

第一節

（節　意）

『町がだん〳〵開けて來た。』

第二節

（節　意）

『町が見ちがへるやうに立派になつた。』

第三節

（節　意）

『町は日にましひらけて行く。』

といつた節意が文意によつて裏づけられる。

ところが從來行はれてゐた段意においては、段落の分け方も多く記載的のそれ

により、表現面における形式的な改行を目標にして行はれてゐた。即ち

第一段……二十七頁一行目まで
第二段……二十七頁終行まで
第三段……二十八頁四行目まで
第四段……二十八頁七行目まで
第五段……終まで

第一段

（段　意）

『町に電燈がついたこと。』

第二段

（段　意）

『電燈がついて町が賑かになつたこと。』

第三段

（段　意）

『自分の家にも電燈がついたこと。』

第四段

（段　意）

『電力による精米所ができ、電話も近いうちにかゝる事になつたこと。』

第五段

（段　意）

『町がひろがつて町外れにも大きな工場ができ、鐵道も近く開通するやうになつたこと。』

といつた形で、各段が個々獨立して、知識的に綜合されてゐた。かくしてその總計をもつて全文の大意と見做してゐたので、個々の文段を要約し得ない限り、文の大

意は的確に把捉し得ないものとされてゐた。尤も大意把捉ととなへて、讀文の初頭に文の概意をとらせることも普通の手續として行はれてゐるにはゐたが、それとてほんの外形的な表現面における意味の要約に過ぎなかつた。したがつて文の大意はとれても、各段落における段意は把捉し得ないといふ、不可思議な結果を見ることも屢であつた。この文についていつても、或ものは

『電燈がついて賑かになつた。』

と或る段落における段意をもつてするものもあれば、

『電燈がついて便利になつた。』

と、一部分の印象をもつてするものもあらう。甚だしきに至つては、

『私どもの町のことが書いてあります。』

といつた題目そのまゝを繰返すものもあるであらう。

いふところの節意はかゝる不自然なものではない。それは文意の内省相であつて、心的無形の體驗流に外ならない。文意はかゝる精神的なるものに支へられ、全一體である文の王座に君臨し得るのである。

節意の性質　節意は文意の展開したものであるから、文意がもつ特質は同様に節意がもつ特質といつても差支はない。即ち

1　情意的であること
2　固定した概念でないこと、
3　非實有的なものであること、
4　不可視的な存在であること、
5　内在性と直觀性とを本質としてゐること、

したがつて、それは文意の内的分析によつて得られることもおのづから明瞭であるであらう。

前にもいつたやうに、節意は文意の幅射したものであるから、その個々も亦生命的な生きた體驗であるのはいふまでもない。したがつてかの段落における段意が外面的な綜合になつてゐるのとは、全然その質を異にしてゐる。彼は知的な表現面の要約に過ぎないが、これは情意的で生々躍動の氣を内にたゝへてゐる。

前の例でいふならば、第一段の段意は――

『町に電燈がついたこと、』

といふのであらうが、第一節の節意は――

『町がだん〳〵開けて來た。』

といふ作者の心の表明であらなければならない。前のは事實そのまゝを要約していつただけであるが、後のは事實を通してその內面に動く作者の心のすがたを端的に表明しようとする。兩者は全然異なつた範疇にあるといへよう。

文は生命的な全一體である。したがつてそこには作者の意識流が脈打つてをり、その一弛一張、高低起伏の變化はおのづと幾つかの思想群を形づくり、相より相たすけて、節、項、目の體系的な組織を具現する。例へば國讀卷九の『北風號』の如き、文に幾多の危機や波瀾をふくんではゐるが、それはおのづと綜合されて生きた全一體としての文格を形づくつてゐる。

『おい北風、今日は大分手ごたへがあるぞ。しつかり賴むよ。』

から、

『乘馬』

の號令で北風が疾風のやうに駈け出す。文はこれからだん〳〵上潮に乘つて、最後の襲擊の一齣に至つて高潮に達してゐる。

中でも一番目ざましかつたのは最後の襲擊。谷一つへだてた向ふの岡に、敵の砲兵が放列をしいてゐる。味方は其の正面から眞一文字に進んで行く。敵彈は前後左右へ雨のやうに落ちて來る。それでも誰一人敵に後を見せる者もない。やがてもう〳〵と上る白煙の間から、怪獸のやうな大砲と、其のまはりにむらがる人かげが見えて來る。砲口はかはる〴〵いなづまのやうな砲火をはいては、耳もつぶれさうにほえ立ててゐる。人はいよ〳〵勇み、馬はます〳〵はやる。

砲煙彈雨、壯烈悲慘の光景が見るやうに描かれてゐる。――特に現在法を用ひて――かうして

『そら、もう一息だぞ。襲へ〳〵。』

に至るまで、ぐん〳〵上へ〳〵と向つてゐた思想の波は、

ちやうど其の時、敵の砲彈が近くで破れつして、其の破片がびゆつと北風のたてがみをかすめた。

から、

北風は、主人の體がくらの上でぐらつとゆれるのを感じた。と、たづなが急にゆるんで、中尉は後方にころげ落ちた。北風は驚いてすぐに立止らうとしたが、後からかけて來る味方に追はれて、思はず其の場から數十間も進んでしまつた。

に至つて急に下潮となり、今まで張りつめてゐた氣持はすつかり緩んで、人間でいつたらこれからがいはゆる悲喫場とでもいふべき情景を展開してゐる。

北風はもう一度あの勇ましい號令が聞きたいと思つて、訴へるやうな目付で主人の顏を見下し、左右の耳をそばだてゝみた。しかし聞えるのはかすかな息づかひばかりであつた。

は下潮の極、

ちやうど其の時、はるか遠方で味方の萬歲の聲がわき起つた。戰爭なれた北

風は、此の聲の意味をよく知つてゐた。さうして之に合はせるやうに、又自分の最愛の主人に味方の勝利を語るやうに、一聲高く天に向つていなゝいた。

中尉の顏には滿足らしいゑみが浮んだ。

の結末に至つて又ちよつと上潮の氣持を見せてゐる。かくして改行段落の想群は相合し相助けて、大なるものは節となり、小なるものは項となり目となつて、おのづから體系的な思想群を形づくる。卽ち、

文意	
『馬でもこんなに主人を思ふものかなア』	第一節 ……百三頁初行まで……
	(節意)『北風とその主人の中尉は親子のやうに親しみ合つてゐた。』
	第二節 ……百十頁終行まで …….
	(節意)『人獸共感の涙ぐましさ。』
	第三節 …… 終まで……
	(節意)『北風最後のいなゝき、中尉はそれをどう聞いたであらう。』

となる。ところが從來の記載的文段によると、

第一段　……百三頁初行まで……

（段意）『北風の樣子と、その主人である中尉の風貌と、戰爭が始つて中尉と一しよに戰地へ向つたこと。』

第二段　……百三頁九行まで……

（段意）『北風が戰場で勇ましく活動したこと。』

第三段　……百四頁五行まで……

（段意）『恐しい日の朝のありさま。』

第四段　……百六頁四行まで……

（段意）『出發前の勇ましい光景。』

第五段　……百六頁六行まで……

（段意）『北風が先頭に立つて進んだこと。』

第六段　……百八頁三行まで……

段意　『はげしい戰爭のありさま。』

第七段　……百十頁二行まで……

（段意）『中尉が敵彈にたふれたこと。』

第八段　……終まで……

（段意）『最後のあはれなありさま。』

といつたやうに、改行を目標としてそのおの〳〵を獨立した同價値のものと見做してゐた。だから文段の數も多く、——節は普通三又は四の簡單な數にあらはれるを常とする——事實を知るだけでもなか〳〵容易なことではない。ましてそれらを要約して大意を求めようとしても、殆んど不可能のことゝいはなければなるまい。

節意は文意の展開したもので、文意は節意によつて自證され、節意は文意によつて基礎づけられる。兩者は密接不離の關係にあつて、一つをはなれて他は成立たない。

節意の表明　文意表明の至難なことは前すでにいつたことであるが、文意の表明が至難なやうに、節意の表明もまた至難である。もと〳〵內在的な、不可視的な

ものであるから、これを言語の象徴性に托するにしてもその全幅を表現しつくすことは殆んど不可能のことゝいはなければならない。要は以心傳心たゞその一端をあげて他を想像にまかせる外はない。

今左におもだつた教材の幾つかを擧げ、その一般を例示することにしよう。

犬ノヨクバリ　（國讀卷二）

第一節　犬ガサカナヲクハヘテ、……トホリマシタ。

（節意）『どこからくはへて來たのだらう。』

第二節　シタヲミルト、……ホヘマシタ。

（節意）『よくばり犬だなァ。』

第三節　ホエルト、……オチテシマヒマシタ。

（節意）『あまりよくばるからだ。』

ユフヤケ　（同上）

第一節　日ガ……ハイリマシタ。

（節意）『うつくしからう。』

第二節　人ガボツボツ……カヘツテキマス。

（節意）『もう仕事がすんだのかなァ。』

第三節　アチラノソラガ……一シヨニウタツテキマス。

（節意）『うつくしいなァ。』

ミヨチヤン　（同上）

第一節　ミヨチヤンガ……オチチヲノンデヰマス。

（節意）『みよちやんがおちゝをのんでゐる。』

第二節　ミヨチヤンハ……ミヨチヤンノネエサンデス。

（節意）『みよやちんはわたくしのいもうとですよ。』

第三節　ワタクシハ……ウマウマトイヒマス。

（節意）『みよちやんはほんたうにかはいゝ。』

ネズミ　ノ　チヱ　（同上）

第一節　コノゴロ……ナカマノモノニイヒマシタ。

（節意）『こまつたなア。』

第二節　ソノトキ……ミンナカンシンシマシタ。

（節意）『よささうな考だ。』

第三節　スルト……ダマツテシマヒマシタ。

（節意）『やつぱり子ねずみは子ねずみだ。』

ハナサカヂヂイ　（同上）

第一節　ムカシ……アリマシタ。

（節意）『それがどうしたといふのだらう。』

第二節　ヨイオヂイサンハ……コロシテシマヒマシタ。

（節意）『かはいさうなことをしたものだなア。』

第三節　ヨイオヂイサンハ……火ニクベテシマヒマシタ。

（節意）『ちやんと報いがあるものだ。』

第四節　ヨイオヂイサンハ……シバラレテシマヒマシタ。

（節意）『それもその筈だ。』

イマハ　（國讀卷三）

第一節　イマハ……花ザカリデス。

（節意）『きれいだなァ。』

第二節　テフテフハ……サヘヅツテキマス。

（節意）『なんてたのしいことだらう。』

第三節　カゼモアタタカデ……一バンヨイトキデス。

（節意）『あそぶには今が一ばんいゝ。』

竹の子　（同上）

第一節　この二三日の雨で……竹の子が出るのです。

（節意）『二三日の雨でこんなにたくさん竹の子が出た。』

第二節　このあひだ……おや竹にするのださうです。

（節意）『竹の子はずん〳〵のびて行く。』

第三節　むかふの……こしらへていたゞくつもりです。

（節意）『いまに竹になつたら竹うまをこしらへていたゞけるがなァ。』

うらしま太郎　（同上）

第一節　むかし……人がありました。

（節意）『それがどうしたのだらう。』

第二節　ある日……海へはなしてやりました。

（節意）『うらしまさんはなさけ深い人だなア。』

第三節　それから二三日たつて……海の上へ出てきました。

（節意）『りゆうぐうにゐても、うちのことが忘れられなかつたものと見える。』

第四節　うちへかへつてみると……おぢいさんになつてしまひました。

（節意）『うらしまさんはかはいさうだなア。』

セミ　（同上）

第一節　ニハノモモノ木ノ……ヌギハジメマシタ。

（節意）『おや蟬がからをぬいでゐる。』

第二節　マモナク……シダイニコクナッテキマシタ。

（節意）『だん〳〵蟬らしくなつて來たぞ。』

第三節　スコシタッテカラ……トンデ行キマシタ。

節意）『あんな大きなものがよくあのからの中にはいつてゐたものだなア。』

第四節　今ニハノ木ニ……コノ中ニキルノデセウ。

（節意）『ないてゐる蟬の中にあの蟬もゐるだらうがなア。』

水デツパウ　（同上）

第一節　私ノウチヘ……ナリサウナノガアリマシタ。

（節意）『これで水鐵砲をこしらへて見よう。

第二節　私ハソレヲヒロツテ……水ヲカケタリシマシタ。

（節意）『うまく出來てうれしい。』

第三節　ソノウチニ……トイフコトデシタ。

（節意）『あなをたくさんあけてはいけない。』

お祭　（國讀卷四）

第一節　うぢがみさまの森で……すみきつた空に立つてゐます。

（節意）『うれしいなア。』

第二節　おひるすぎに……たいそうにぎやかです。

（節意）『たいそうにぎやかだつた。』

第三節　今年は……花火が上るさうです。

（節意）『ばんもにぎやかだらう。』

山びこ　（同上）

第一節　正太郎が……山道を通りました。

（節意）『さうしてどうしたのだらう。』

第二節　犬のすがたが……だれも居ませんでした。

（節意）『ふしぎだなア。』

第三節　うちへかへつて……いつたからです。

（節意）『おもしろいものだなア。』

しひの木とかしのみ　（同上）

第一節　思ふぞんぶん……草もよせつけぬ。

（節意）『しひの木はばかに威張つてゐる。』

第二節　山の中から……おくものか。

（節意）『なあに負けるものか。』

第三節　何百年か……かしの木か。

（節意）『それはむろんかしの木だ。』

山がら　（同上）

第一節　私のうちに……ほどになつて居ました。

（節意）『かはいゝ山がらだつた。』

第二節　それがかはいさうに……行つてしまひました。

（節意）『かはいさうなことをした。』

第三節　これは私が……思はないことはありません。

（節意）『まだ生きてゐるだらうか。』

曾我兄弟　（同上）

第一節　曾我兄弟は……と答へました。

（節意）『どんなにか口惜しかつたらう。』

第二節　九つとなり……すきはありませんでした。

（節意）『ずゐぶん苦心したものだなア。』

第三節　ある年、よりともは……のぞみをとげました。

（節意）『おもひがかなつてうれしかつたらう。』

大日本　（國讀卷五）

第一節　大日本、大日本……おぼしめされる。

（節意）『ありがたいことだなア。』

第二節　大日本、大日本……お仕へ申す。

（節意）『りつぱな國柄だなア。』

第三節　大日本、大日本……かゞやきまさる。

（節意）『えらい國だなア。』

鯉のぼり　（同上）

第一節　ゆふべの雨が……氣持よくてつてゐます。

（節意）『いゝ氣持だ。』

第二節　さをの先の矢車が……地の上をおよぎます。

（節意）『鯉はげんきがいゝなア。』

雨　（同上）

第一節　此ノ頃ハ……雨ハドウナッテシマフノデセウ。

（節意）『雨水はどうなるのだらう。』

第二節　カラカサニ……水ノカサモ多クナリマス。

（節意）『高い方から低い方へ流れる。』

第三節　雨水ノ流レル道ハ……海ヘ行キマス。

（節意）『川になつて海へ流れこむ。』

第四節　雨水ハ……空ヘカヘルノモアルサウデス。

（節意）『流れない雨水はどうなるだらう。』

養老　（同上）

第一節　昔美濃の國に……喜ばせてゐました。

（節意）『孝行者だなァ。』

第二節　或日山の中で……おとうさんに上げました。

（節意）『孝行の徳だらう。』

第三節　いつか此の事が……お改めになつたと申します。

（節意）『ありがたいことだなァ。』

日本三景　（同上）

第一節　日本の國には……日本三景と申します。

（節意）『どんな景色だらう。』

第二節　松島は……日本一の大鳥居があります。

（節意）『なるほどいゝ景色だなァ。』

くりから谷　（國讀巻六）

第一節　木曾義仲が……ぢんを取りました。

（節意）『どちらが勝つだらう。』

第二節　兩方からおしよせて……人馬で埋まりました。

（節意）『なんてひどいあわてかただらう。』

第三節　大將維盛は……加賀の國へにげました。

（節意）『氣の毒だなァ。』

弓流し　（同上）

第一節　屋島の合戰に……海へ落しました。

（節意）『義經はその弓をどうしただらう。』

第二節　弓は潮に引かれて……弓を拾ひ上げました。

（節意）『あぶないことをしたものだ。』

第三節　陸へ上つた時……と言つたと申します。

（節意）『さすがに義經は義經だ。』

第四節　義經に此の名を……勝つたのでございませう。

（節意）『なるほど勝つ筈だ。』

鮭　（同上）

第一節　叔父サンニ……書イテ置カウ。

（節意）『どんな話だらう。』

第二節　鮭ハ海ノ魚デモアレバ……川デ死ンデシマフラシイ。

（節意）『りこうな魚だなァ。』

第三節　翌年ノ春ニナッテ……叔父サンガ言ハレタ。

（節意）『ふしぎな性質をもつてゐる。』

第四節　鮭ハ寒イ國ノ魚デ……産地ダサウダ。

（節意）『鮭は寒國の魚だ。』

象　（同上）

第一節　見せ物小屋で……絵で見た通りであつた。

（節意）『大きいなァ。』

第二節　象つかひが……顔をあふぎ出した。

（節意）『藝が面白い。』

第三節　此の時……一度にふき出した。

（節意）『ほんたうにかはいゝ。』

記念の木　（同上）

第一節　村の學校の……とうに戰死した。

（節意）『あの子が生きてゐたらなァ。』

第二節　あの學校が……あんなに高くなりました。

（節意）『あの時のことが思ひ出される。』

第三節　昨日學校で……大事にするとおつしやつた。

（節意）『ありがたいことだ。』

潮干狩　（國讀卷七）

第一節　舟が岸をはなれた。……みんな下りた。

（節意）『愉快だなァ。』

第二節　小さい熊手で……一つあつたことであつた。

（節意）『潮干狩はたのしかつた。』

第三節　舟の中でゆつくり……誰もゐなかつた。

（節意）『かへりも愉快だつた。』

第四節　昨日おかあさんに……大きなのをよつたのでございます。

（節意）『昨日の潮干狩はたのしかつた。』

馬　（同上）

第一節　馬は……すぐ歩く。

（節意）『馬はたいそう元氣がいゝ。』

第二節　走ることがはやくて……入れて置かれたのである。

（節意）『馬は役に立つので昔から大事にされた。』

第三節　馬の高さは……一寸二寸などといふ。

（節意）『馬の高さはかうしてはかる。』

第四節　我が國の馬は……良馬を見るやうになつた。

（節意）『近頃我が國の馬も改良されてよくなつた。』

獅子と武士　（同上）

第一節　昔一匹の獅子……息はたえんとす。

（節意）『さすがの獅子もあぶなかつた。』

第二節　此の時……無二の從者となれり。

（節意）『獅子もよほどうれしかつたと見える。』

第三節　かくて幾年かすぎし後……波の底に入りぬ。

（節意）『獅子はほんたうにかはいさうだ。』

安倍川の義夫　（同上）

第一節　百八九十年昔……ひじやうなさわぎでございます。

（節意）『ずゐぶん混雜したことだらう。』

第二節　此の時……といつて相手になりません。

（節意）『なんて義理がたい人達だらう。』

第三節　男はしあんにくれて……たくさんやつたと申します。

（節意）『役人が感心したのも尤だ。』

二百十日　（同上）

第一節　よいあんばいだ。……よく晴れてゐた。

（節意）『朝はいゝ天氣だつたがなァ。』

第二節　それが朝飯がすむと……心配するのださうだ。

（節意）『何だかへんな天氣になつて來た。』

第三節　どうかひどい風に……軒下に運んだりされた。

（節意）『とう〳〵大風になつたのかなァ。』

第四節　仕合はせに……風は全く止んだ。

（節意）『無事にすんで仕合はせだつた。』

山の秋　（國讀卷八）

第一節　秋は山が美しい。……美しい實をならべてゐる。

（節意）『秋は山が美しい。』

第二節　四十雀・目白・ひよどり……こずゑでさへづるのである。

（節意）『小鳥の聲でにぎやかだ。』

第三節　栗のいがのゑむのも……今である。

（節意）『今が一ばんたのしい。』

第四節　炭を燒く煙も……間もなく白くなるだらう。

（節意）『もうすぐ冬だ。』

吳鳳　（同上）

第一節　臺灣の蕃人には……おかげだと申します。

（節意）『吳鳳といふ人はどんな人だらう。』

第二節　吳鳳は今から……聲を上げて泣きました。

（節意）『ほんたうに感心なものだ。』

第三節　さて蕃人どもは……ゐるのだといひます。

（節意）『神にまつられたのは當然だ。』

啞の學校　（同上）

第一節　もと僕のうちに……啞の學校に入れてある。

（節意）『それがどうしたのだらう。』

第二節　信吉は僕の兩親に……信吉と一しよに出かけた。

（節意）『子供のことが心配でならなかつたのだらう。』

第三節　學校へ行つて……涙をぽた〳〵落した。

（節意）『親の身としてどんなにかうれしかつたらう。』

第四節　先生はいろ〳〵……學校の門を出た。

（節意）『學校の敎育はありがたいものだ。』

分業　（同上）

第一節　マッチは……安く賣れるであらうか。

（節意）『マッチはどうしてこんなに安く賣れるだらう。』

第二節　たとひ休まず働いても……さうおうにまうかるのである。

（節意）『分業の利益は大したものだ。』

第三節　分業は……皆これによるのである。

（節意）『今は分業の世の中だ。』

第四節　分業で仕事をする時……世は相持のものである。

（節意）『やはり世は相待だ。』

乃木大將の幼年時代　（同上）

第一節　乃木大將は……泣人だといつたといふことである。

（節意）『乃木大將も小さい時は弱虫だつたなア。』

第二節　大將の父は……きたへなければならぬ。

（節意）『大將がえらくなられたのも、おとうさんやおかあさんのお力だ。』

第三節　郷里の家は……光つてゐたといふことである。

（節意）『こんな家におそだちになつたから、おえらくおなりになつたのだらう。』

第四節　此の父母の下に……いはれのあることである。

（節意）『大將が武人の手本と仰がれになるやうになつたのも當然だ。』

五代の苦心　（國讀卷九）

第一節　病みつかれた六十ばかりの……秋風がはた〳〵とあふる。

（節意）『老人は何を少年に話して聞かせたのだらう。』

第二節　これまで折々……すや〳〵と眠つた。

（節意）『佐藤家四代の苦心は大したものだなァ。』

第三節　これは今から……甚だ多かつた。

（節意）『父祖四代の志をついだ信淵先生もえらい。』

第四節　歡庵以來……大成したのである。

（節意）『佐藤家五代の苦心は實に感心だ。』

若葉の山路　（同上）

第一節　だら〳〵坂を……じつとりと汗ばんで來る。

（節意）『いゝ氣持だなァ。』

第二節　目じるしの……お晝頃だらう。

（節意）『峠から眺めた景色は又格別だ。』

第三節　やうやく清水まで來て……石井君であつた。

（節意）『迎へに來た友達にあつてうれしい。』

石安工場　（同上）

第一節　石安工場と……誰もうなづく工場あり。

（節意）『どんなぢいさんだらう。』

第二節　石碑を刻む……來年まではとくりかへす。

（節意）『よく働くぢいさんだなァ。』

第三節　今朝遠足に……めがねを掛けてはつぴ着て。

（節意）『まあ、今朝も早くから働いてゐる。』

初秋　（同上）

第一節　日本晴のよい天氣。

（節意）『いゝ天氣だなァ。』

第二節　おかあさんと……もう直に食べられる。

（節意）『秋の氣持はなんともいへない。』

第三節　午後には……きのこ取りに行くのだ。

（節意）『午後のきのこ取も愉快だらう。』

水兵の母　（同上）

第一節　明治二十七八年戰役の時……泣いてゐた。

（節意）『なぜ泣くのだらう。』

第二節　ふと通りゝかつた……其の手紙を差出した。

（節意）『水兵が殘念がるのも尤だ。』

第三節　大尉はそれを取つて……と言聞かせた。

（節意）『水兵の母は感心なものだ。』

第四節　水兵は……笑つて立去つた。

（節意）『疑がはれて水兵も滿足だつたらう。』

明治神宮參拜　（國讀卷十）

第一節　十月十二日……參拜せり。

（節意）『うれしいことだ。』

第二節　青山の神宮前停留場にて……數多しといふ。

（節意）『明治神宮は神々しい。』

第三節　寶物殿に到りて……人工を加へずといふ。

（節意）『御在世中の御聖德がしのばれる。』

第四節　舊御苑を出でて……と語られたり。

（節意）『國民の眞心が涙ぐましい。』

霧　（同上）

第一節　しらゝと……朝霧流る。

（節意）『野山をこめた朝霧の氣持は何ともいへない。』

第二節　しめやかに……夜の霧流る。

（節意）『ちまたを包む夜霧の趣も又格別だ。』

鉢の木　（同上）

第一節　雪の日の……旅僧あり。

（節意）『ずゐぶん困つたことだらう。』

第二節　とあるあばら家の……心強くも立去りけり。

（節意）『常世は廉潔の武士だなァ。』

第三節　降積みし雪も……御前を退きけりとぞ。

（節意）『常世の至誠が天に通じたのだらう。』

温室の中　（同上）

第一節　寒い北風に……春の國に居るやうだ。

（節意）『暖かだなァ。』

第二節　先に立つたにいさんが……とお笑ひになつた。

（節意）『きれいだなァ。』

第三節　外はさつきよりも……見るからに寒さうだ。

（節意）『外は寒いなァ。』

兒島高徳　（同上）

第一節　元弘二年三月……よろひの袖をしぼりけり。

（節意）『天子様がおいたはしい。』

第二節　此の頃……笑ませ給ひぬ。

（節意）『高徳は忠義な武士だなァ。』

第三節　昔支那に……聞え上げたるなり。

（節意）『天子様もどんなにかおよろこびになつたことだらう。』

孔子　（國讀巻十一）

第一節　支那幾千年の人物中……孔子に及ぶはなし。

（節意）『孔子は大聖だ。』

第二節　孔子は……七十二人なりき。

（節意）『孔子は不遇の人であつた。』

第三節　論語は……あらはれたりといふべし。

（節意）『孔子の人格は實に偉大だ。』

瀬戸内海　（同上）

第一節　本土の西……瀬戸内海といふ。

（節意）『瀬戸内海のありどころ。』

第二節　瀬戸内海には……また一段の趣あり。

（節意）『内海の景色は實にきれいだ。』

第三節　瀬戸内海の沿岸には……一大公園なりといへり。

（節意）『世界における海上の一大公園だ。』

ふか　（同上）

第一節　昔……話である。

（節意）『どんな話だらう。』

第二節　熱帶の暑さに……しきりに勵ました。

（節意）『たのしさうだなア。』

第三節　ちやうど其の時……近くにせまつてゐた。

（節意）『すは大變だ。』

第四節　ものすごい程……それを見つめてゐる。

（節意）『子を思ふ親心はほんたうに涙ぐましい。』

遠泳　（同上）

第一節　今日は……出發の號令を待つ。

（節意）『何だか心配さうだ。』

第二節　やがて……とう〳〵大島についた。

（節意）『ちよつと弱つたが我慢して泳いだ。』

第三節　あゝ五海里の海上を……萬歳と叫んだ。

（節意）『あゝうれしい。』

ウェリントンゞ少年　（同上）

第一節　昔イギリスの……と言ひつけた。

（節意）『ジョージがどうするか知ら。』

第二節　ジョージがとんで行つて……一同を引連れて立去つた。

（節意）『ジョージもえらいがウェリントンもえらい。』

第三節　ジョージは……ウェリントン公爵萬歳。

（節意）『流石に大國民だ。』

蜜柑山　（國讀卷十二）

第一節　沖を走るは……のどかに聞えて來る。

（節意）『蜜柑採歌がのどかだなア。』

第二節　今登つて來た方を……ちよきん〳〵と聞える。

（節意）『蜜柑山はきれいだなア。』

第三節　ふもとの川を……船歌が聞えて來る。

（節意）『ふもとの川ものどかだなア。』

鎌倉　（同上）

第一節　七里が濱の……悲憤の涙わきぬべし。

（節意）『鎌倉は思出の多いところだ。』

第二節　歴史は長し……昔の音やこもるらん。

（節意）『鎌倉はゆかしいところだ。』

月光の曲　（同上）

第一節　ドイツの……若い時分のことであつた。

（節意）『どうしたといふのだらう。』

第二節　月のさえた冬の夜……めくらの娘を見た。

（節意）『ベートーベンは流石にえらい音樂家だなァ。』

第三節　彼は急いで……此の曲である。

（節意）『名高い月光の曲はさうして出來たのかなァ。』

鳴門　（同上）

第一節　阿波と淡路の……誇のあるところ。

（節意）『鳴門は天下に名高い。』

第二節　山もとゞろに……潮けむり。

（節意）『渦潮は壯觀だなァ。』

第三節　裸島より……木の葉舟。

（節意）『木の葉舟はほんたうに勇ましい。』

勝安芳と西郷隆盛　（同上）

第一節　明治元年……さわぎである。

（節意）『江戸はどうなるだらう。』

第二節　慶喜から……につこり笑つた。

（節意）『兩雄の會見は天下の大事だ。』

第三節　西郷は……成し遂げられるやうになつた。

（節意）『維新の大業がとゞこほりなくはこんだのは兩雄の力だ。』

三

節意と句意　節意を支持するものに句意がある。句意は語意と共に普通に語句として取扱はれてゐる。しかし、彼は外形的であり、これは內面的である。彼は概念的固定的であるが、これは生命的で生々躍動の氣を內含してゐる。在來の訓詁流やエルチェ式においては、語句を本位にしてその個々を明かにすることによつて全體を明かにし得るものと心得てゐた。それはちやうど活動寫眞のフィルムをぶつ〳〵に切りはなして眺めるやうなもので、その個々を知ることは出來るかも知れないが、大切な生命ともいふべき活動――意識流――そのものを見ることは出來ない。個々は全體の中にあつてのみ意味があり、全體の動きの中にあつてのみ生きることはこの比喩によつても知られよう。

節意を支持する句の中に特に重要の位置にあるものを中心句といふ。中心句は想の流れのおのづから波立つたところで、節意を文意の輻射と見るならば、これはその火花を散らしたところとでもいふべきであらう。例へば卷四『お祭』にお

いて、

第一節では――

『今日はお祭です。』

第二節では――

『三人でお宮へまゐりました。』

第三節では――

『おいはひの花火』

が中心句となつてゐる。この中心句を手操れば他の語句は芋づるのやうにぞろぞろとついて來る。だからこの句を中心にして問ひを入れて見ると、文は面白いやうにほぐれて、どんな縺れでもきれいに解けてしまふ。例へば第一節の『今日はお祭です』を中心にして、

問　どこのお祭ですか。

答　うぢがみさまのお祭です。

問　どうしてそれが分りますか。

答 うぢがみさまの森で、たいこのおとがしてゐます。

問 それはいつですか。

答 あさからです。

問 たいこのおとだけですか。

答 のぼりも立つてゐます。

問 どんなのぼりですか。

答 大きな字を書いたのぼりです。

問 どこに立つてゐますか。

答 すみきつた空にです。

かくして答を文に求めることによつて、おのづと『うれしいなァ』といつたこの節における節意も把捉されるであらう。尤も中心句の發見は讀者である子供の仕事であつて、教師がひとりぎめで無理におしつくべき性質のものではない。だから原則としては子供各自が思ひ〳〵に選擇すべきであるが、團體教育においては多く討議又は話合の形で行はれるのが常である。

巻九『いもほり』についても、

第一節では——

『小をどりして喜んだ』

第二節では——

『驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲』

第三節では——

『ふと氣がつくと』

などの句が中心となつてゐるやうだが、これとて子供の討議に附したら、いろ〳〵雜多な意見が出るにちがひない。第一節においても、

『先生はにこ〳〵して』

『これからいもほりをしませう』

『學校園へお集りなさい』

『毎日々々待つてゐた命令だつたので』

『小をどりして喜んだ』

『校舍の後の菜園に集つた』

などとり〳〵に主張されるであらう。

第二節においても、仕事の方を強く見る子供は、

『皆は一せいにほりにかゝる』

をあげ、興味を中心にした子供は、

『じゆすつなぎになつて、ころ〳〵と出て來た』

をあげ、全體の氣持を本位にした子供は、

『驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲』

などがあげられるであらう。もと〳〵生命體の一部分で、どこを切つても血の出るやうな、生き〳〵したものであるから、どの句を取つても中心とするに敢て差支はない筈であるが、想の動きや展開のすがたを見極める上から、成るべく含蓄に富んだ働きの多い句を選ばなければならぬことになる。これは句と句を比較して見るか、前の例でもいつたやうに、問ひをかけて働かせて見るかして、その含蓄の如何を確めて見る外はない。

同じ句の中でも比較的重要なものと、さうでないものとがある。したがつてその重要なものを先にして漸次重要ならざるものに及ぼす。フッセルがいふ自由變更である。自由變更は事實から本質に到達する方法であつて、文意——節意も——の把捉はかくすることによつて、おのづと得らるべきものである。フッセルによれば我々が或る對象について自由變更を行ふに當つては、先づその手がかりとしてその對象における或る要素が他の要素から際立つて意識せられてゐなければならぬ。然らば際立つとか、目立つとかいふ現象は如何なる現象であるかといふに、我々の能働性には常に受働性が先立ち、我々が受働的におかれてゐる經驗の世界においては、その現象間に聯合と稱するもろ〳〵の綜合が豫め存在してゐる。さうして相互に聯合されてゐる現象乃至現象のもろ〳〵の側面のうち、他を喚び起すものと、他によつて喚び起されたものとがあり、前者は聯合するもの、後者は聯合せられたものである。さうしてこの喚び起すところのものが我々にとつて特に他のものから際立つて見える現象乃至その側面である、我々が今問題としてゐる自由變更もまたかゝる聯合において際立つて見えるものを手がかりとし、

之に基いて有意的に自由なる變更を行ふのであると、讀みの力の開拓はかゝる修練の結果に待つべきであつて、一語全文の精神も亦こゝに出發すべきであらう。

句意と語意　句意と語意との學的根據をなすものは、綜合意識におけるノエマ、ノエシスの關係である。綜合意識――複合意識といつてもいゝ――とは、意識と意識とが綜合されて一つの意識をその上に形成することである。綜合された意識の各ノエシスを土臺として、その上に綜合されて出來上つた一つの意識のノエマが形成されるのである。例へばこゝに一匹の牛と一匹の馬とがゐるとする。我々は先づ牛を知覺的に把捉する。さうしてそこにありと定立するのである。次にこの牛を知覺の把捉から離さないでおきながら、しかし自我の志向を傍へ向けて馬を知覺する。さうしてこれをもそこにありとする。たゞこれだけでは各意識に分離してゐるが、こゝに意識の綜合が働くのである。すると例へば『牛とさうして馬』といふ具合に兩者を綜合的に定立するのである。かくてこのノエシスの側の綜合定立に應じて、ノエマの側において『牛とさうして馬』といふ綜合

的對象が意識される。かゝる綜合定立によつて、意識がノエシスの側にもノエマの側にも複合的になるのである。

木の枝に鳥がとまつてゐるとする。我々はこれをそこにありとして知覺してゐるときは意識の構造は單純である。然るにかやうにありとして知覺されたものに、更にそれを追つぱらひたいとの欲望の定立が加はる時は、意識の構造は複合的になるのである。今その木の下に子供がゐるとしよう。さうして我々はその子供があの鳥を追つぱらつてくれるといゝがなァと思つたとする。この場合の欲望は單純な欲望ではなくて、他に關係する欲望となる。かゝる定立を單純定立に對して綜合的定立といふ。意識の構造はかくして漸次に複雜化するのである。

アメ　ガ　ヤミマシタ。
ヒ　ガ　テリダシマシタ。
スズシイ　カゼ　ガ　フイテ、
ヨイ　ココロモチ　デス。